

君の代わりに



「自由になりたいんだ」

長い沈黙の後でそう言った僕を見て、ユミは「もはやお手上げ」、「全部あきらめた」といった調子でため息をついた。もはや涙すらない。乾いた冷たい視線を僕に注いで、再び、ため息。まあ、無理もないのかもしれない、いきなり公務員を辞めると言い出した僕に対しての絶望っただろう。彼女が手に入れたと思っていた安定した生活は、膨らんだ期待を詰め込んだ風船を突然針でつついたように、ぶしゅっと無様な音を立て、くるくる螺旋を描いて飛び回り、煙にいぶされた蚊のように床へぽとりと落ちたも同然なのだから。

それからすぐ後、ユミは別れ話を切り出してきた。とはいえ、僕はそれを覚悟していた、というか、予期していたけども。学生時代から四年も付き合っ、僕が公務員になり、彼女は当然のように結婚を期待していた。安定した生活！ やりたくもない腰掛けの仕事をとっと辞めて、昭和の女のように、家にこもって子育てをする専業主婦になる、それが彼女のシナリオだった。そこへ来て、僕が仕事を辞めるなどと言い出したので、彼女の取り乱しようはなかなかのものだった。ユミはどちらかといえば控えめで、気立てもよく、美人で、そこそこ利発で（利発すぎないのもポイントだ）、平凡な男の結婚相手としては申し分なかったし、彼女も多くを望んでいるつもりはなかったのだ。せめて、ほどほどの安定した生活を提供してくれる男と結婚することくらいが彼女の望みで、僕はそういう理想にかなう穏やかで平凡な男だった。そんな二人だから、付き合いはじめからそんなに情熱的な恋愛をしているわけではなく、とろ火のようでしかなかった恋愛の炎はとっくに消えて、後は無味無臭の結婚生活を迎えるだけ、そういうコースが、誰の目にも明らかだっただろう。彼女にとって、僕のオスとしての価値はそういう所だけだったのに、僕はそれを投げ捨ててしまったというわけだ。だから、彼女は当然のように、僕と別れることを決意した。

別に、僕はユミを薄情な女だとかいうふうには思っていない。女性の社会進出の時代だとかいっても、そこまでガツガツした性格でなくて、自分の能力に自信があるわけでもないなら、本音ではそういう古風な選択肢を望んでいてもおかしくないだろう。いまだに男女差別の慣習を残した厚かましい日本の会社であえて働こうなんて、思えなくても無理はない。彼女にとっては単なる色恋の問題ではなく、人生の問題なのだ。だから、ユミが別れたいと言ってきたとき、僕はそれを待ち構えていたかのように、全く驚きもせず、「うん」と聞き分けの良い五歳児のような返事をしただけだった。ユミは失望を通り越してあきれていた、僕をののしる言葉さえ思いつかないといった感じで、口をぽかんと開けたままっ立っていたかと思うと、それ以上何も言わずに部屋を出て行ってしまった。それ以来、僕はユミと連絡を取っていない。

未練？ 無いと言えは嘘になるだろう。ユミと一緒にいるとき、僕はとてもしラックスできていたし、重ねて言うけど、まあまあ美人だったし、気立ても良くて、延々と愚痴を言ったり、言葉尻を捉えてつかかってくるといったこともない、つまり、僕にはもったいないくらいの恋人だった。今でも、ときどき二人で過ごしたことを思い出す。でも、僕はそれを取り戻そうとは思っていない。たとえそれが理想的な相手であっても、誰かと結婚して、子供を作って、家でも建てて、ローンを払い家族を養うために会社だの役所だのに勤めて来る日も来る日も働き続

ける、そういう人生を僕は望んでいなかったのだから。というか、そんなもの、まっぴらごめんだ。

「自由になりたいんだ」

だから、僕はそんなことを口走った。いい歳こいた男の言うことじゃないかもしれないが、正直な気持ちなのだからしょうがない。世間的にはダメ男の烙印を押されるかもしれないが、この際隠すこともない。だから本音を言ってしまおう。大学を出たとき、僕にはやりたいことなんかなかった。就職活動にいそしむ周りの同級生たちが一生懸命に自分の性格や人生や趣味嗜好をごたませにしてねじり上げ、やりたいこと及びそれに適合する自己像を捏造すべく奮闘している横で、僕は全くそんな気もなく、一番自由を奪われないで、かつ安定しているという、双方のバランスを備えた仕事は何かということを考えていた（そもそも、本当にやりたいことがあったらいちいち考える前にすでにやってるはずだ。つまり、彼らにとっての「やりたいこと」というのは、仕事に人生をささげるためのエクスキューズであり、働く前からすでにワーカホリックになるための本能がすり込まれてしまっている。ちまたでは若者の意識の変化などと言われているものの、その本質は古い人々と変わらない方向に向かう。恐ろしや、恐ろしや。もし仮に、僕にそういう意味での「やりたいこと」があったなら、僕はそれをドブにでも投げ捨てていたことだろう）。僕に特殊な能力があれば話は別だが、なにせ凡人なので、どうにか凡人の出来る範囲で生活費を稼がなきゃいけない。普通の会社員は論外だった、残業残業で自由もへったくれもない、僕の父親もそんな感じだったけど、あんな人生は絶対イヤだ。スマートに働ける外資系企業？

僕は能力のない凡人で、成果を出すための努力も競争も苦手なのでノーサンキュー。起業？そんなバイタリティもアイデアもあるわけない。弁護士を目指すなんていう頭も金銭的余裕もない。そんな体たらくで、まだまだと思えたのが市役所で働くことだ。運が悪ければ残業の多い部署に配属されるけど、ある程度の自由を確保できる可能性がある選択肢として僕に残されているのは、そのくらいしかなかった。

もちろん、僕はそこで働いていて幸せではなかった。お役所は古臭い家父長制と上意下達で動く組織で、文字通り「何を言っているかではなく、誰が言っているか」で物事が進む世界だ。皆が盲目的にそれに従っていたけど、僕にとっては不合理で馬鹿馬鹿しいことばかりだった。いや、たぶん、役所だけじゃなくてほとんどの組織がそうなのだろう、社会というのはそういうふうになっているのだろう、そう思いこんでしまったとき、僕は逃げ場のない世界が息苦しくてたまらなくなり、とうとうある日、上司と大ゲンカの末に辞表を叩きつけてしまった。「お前の代わりなんかいくらでもいる」と上司に言われて、僕は「お前の代わりだっていくらでもいる」と言い返した。子供の頃から、僕はずっと穏やかな人間だった、誰かに対して真正面から怒ったことなど、後にも先にもその一回きりだ。

僕がロールモデルとすることのできる人間などいなかった。さらに言ってしまうえば、今まで生きてきた中で、そういう人間に出会えたことがない。僕がせまい世界で生きているからというだけのことかもしれない、確かにそれも一理ある。でも、今の僕にとって、世界の限界はこの程度

のものだ。だから、僕はその程度でしかない世界を投げ捨てることにした。親とか上司とか先輩とかの背中を見て、人は育つというけれど、僕の場合は、いわば、そういう背中に背を向ける生き方を選んだのだ。できあがってしまった社会が提供してくれるものの中で、僕が欲しいと思えるものなど、何ひとつない。

*

といったような感じで人生を投げ捨てたものの、僕の心臓はまだ動いていて、呼吸も続いている。死にたいと思ってるわけじゃないから、死なずにすむように、生活費を稼ぐ必要があった。唐突だけど、ここでひとつ。自分で言うのもなんだが、僕は詩人だ。もともと隠れた趣味で、ユミにも友達にも家族にも知らせずに、こっそりインターネットの隅っこにブログを作り、そこに自作の詩を書きなぐっていたのだが、ある日、偶然をそれを発見した小さな出版社の人間が、それを本にしたいと連絡してきた。半信半疑だったものの、僕はその人に会い、そしてとうとう、本当に一冊の詩集を世に出してしまった。たいして売れることもなく、僕の手には小遣い程度のお金しか入らなかったけれど、それ以来、たまに原稿の依頼が来るようになる。というわけで、僕にはとりあえず、ほんのわずかの実入りでしかなくても、金を稼ぐ手段がないわけじゃなかった。でも、その収入はもちろんのことながら、失業して火の車になった僕の家計にとって、水鉄砲の一発にも劣るものでしかない。だから、僕は何か他のことをして金を稼がなきゃならなかった。

組織人である公務員としての経験なんて、組織の外に出たら役にも立たないわけで、僕はその方向で自分にスキルを見出すのを断念せざるを得ない。となると、僕にできるのは言葉を使って何かをすることくらいしかないだろう。ならば、というわけで、僕が考えついたのが、ゴーストライターとしての仕事だ。といっても、有名人の本について代筆をするという意味でのゴーストライターじゃない。僕がやることにしたのは、普通の人代わりに、何かを書いてあげることだった。手紙とか、そういうものを書くのが上手くできないという人の代わりに、それを書いてあげるのだ。そして、その対価として、いくらかのお金をもらう。

何だそりゃ？　と思う人も多いことだろう。いや、実際、僕自身、他人に成り代わって何かを書くことが可能だなんて思っちゃいない。できるだけ、その人ならこんなふうには書くだらうってことを想像しながら書くんだけど、僕は、絶対にその人自身にはなり得ない。どれだけそれらしく振舞おうとも、結局、僕は僕以外のものではないのだ。僕と他人との間には、どうしても越えられない正体不明の壁があって、その存在ははっきりしてるのに、その輪郭はくっきりしない。その正体が分かれば、僕は他人の代わりに何かを書くことができるのかもしれない、でも、どうにも、それを実現するのは不可能な仕事らしかった。だから、僕はそれが可能なフリをして、クライアントたちの悩みに応え、代筆をするのだ。

ともあれ、世の中に文章が苦手だという人は思いのほかいるもので、主に手紙、それからスピ

一チが多かったけど、読書感想文やエッセイ、就職活動のエントリーシートなんて依頼もあった。基本的にはメールで依頼を受けている、でも、たまには直接会って話したいという人もいた。人によって様々だけど、みんな手紙やスピーチに込めたい思いをあれやこれやと僕に語って聞かせてくれる。妻と離婚したせいでもう十年以上会っていない娘の結婚式に突然呼ばれたのでどうしても感動的なスピーチをしたいとか、遺言として自分の人生の物語を残したいので口述したことを上手いことまとめて感動的に仕上げてくださいとか、恋人の誕生日に気の利いた詩でも贈りたいのだが自分では全く書けないのでこの熱い思いを三行で表現してくださいとか、面白いものから無茶なものまでいろいろあった。僕は孤独を好む人間で、仕事を辞めるまでは人に会うなんておっくうだったけど、いざこういう状態になって、毎日一人でいる時間ばかりになると、たまには人に会うのも悪くないなと思えたりするから不思議だ。

そう、普段、僕は誰とも話さなくなった。一人で暮らしている部屋で、毎日昼過ぎに起きて、仕事の依頼が来てないかチェックをする。たいていぼうっとしたままだらだら夕方まで過ごし、散歩がてらスーパーまで行く、そして適当に自炊して腹ごしらえをすると、仕事があればだいたい六時くらいから働き始める。仕事が無ければ何もしない、ネットの動画サイトで、分かりもしない英語やその他外国語の再生時間の長いビデオを流しておいて、ベッドに寝転んでいただけだ。見るのではなく、本当にただ流しておくだけ。日本語のビデオやテレビ番組は嫌だった、それを見ていると、自分が投げ捨てた日本社会というものが、タコのゾンビのように触手を伸ばして追いかけてくる気がするのだ。やっとその外に出られたのに、今まで僕を捕らえていた呪縛が、また僕をその内部に飲み込もうとしているような感じがして嫌だった。日本語はできるだけ聞きたくない、だから、テレビも持っていない。そうやって理解できない外国語を聞き流しながら、気が向いたらいくらかの詩集でも眺めてみる。詩集のラインナップには何のこだわりもない。時には、思い出したように絵を描いてみたり詩を書いてみたり、ちょっと自作のインテリアにこだわってみたり。どうでもいいことで日々が過ぎていく、これはけっこうな贅沢だ。仕事とか結婚したがる恋人とか、どうでもよくないことで過ぎていく日々なんて、僕にとってはどうでもよくなっていた。今は、どうでもいいことばかりの日々のほうが大事だ。

この先どうなるかなんて分からない、考えもしない。収入は充分じゃない、貯金は徐々に減っている、あと一年持つだろうか、どうだろうか。でも、そんなことはどうでもよくなっている、そのどうでもよさは、この上ない贅沢で、どうしようもないほど心地良い。僕は何者でもない、ただ、浮雲のように、ふわふわと、バカみたいに、生きながらえている。

*

そして、僕は「彼女」と出会うことになる。貯金の底が見え始め、それまで脳天気を決め込んでいた僕の、額にじわじわ冷たい汗がにじみ始めたころだった。

「彼女」の依頼は、六月の始め、直筆の手紙とともに僕のところに舞い込んだ。いつもはチラシ

しか入っていないポストに、和紙でできたこぎれいな便箋が、ぽつんと正座している上品な女の子みたいに収まっていた。なんだか丁寧に扱わなくてはいけないような気がして、普段はビリビリと封筒を破ってばかりのくせに、カッターと定規を使ってすっと切れ目を入れると、手紙が折れたりしないように、十分な通り道を確保しながら取り出し、端を指先でそっとつまんで開いてみる。

拝啓

入梅の候、降る雨の肌ざわりがしなびた綿くずのようになってきたこの頃、いかがお過ごしでしょうか、もとい、はじめまして。

インターネットであなたの名前を検索して、偶然に、ホームページを見つけました。こんな変わったお仕事、なさっているのですね。とても面白いなって思いました。

きっと、どうして面識もない私が、あなたの名前を知っているのか、疑問に思われたことでしょう。その理由ですけれども、私、あなたの詩集を繙いたことがあるのです。

ある日、ぶらぶらと、特に当てもない散歩の途中、偶然立ち寄った古本屋のワゴンセールの中で、あなたの詩集に出会いました。値段はたった十円でしたので、暇つぶしにと、私はその本を買い求めたのです（お気を悪くなくさないでください、私、ちょっと正直すぎるところがありますので。でも、これっぽっちも悪気はありません）。初めは公園のベンチに座ってページを開いたのですが、ちょっと日差しが明るすぎたので、木陰へ。そして、パラパラと、あなたの書いた言葉を読んでいったのです。

何の変哲も無いような気がしていましたが、でも、実際は個性的だったのかもしれませんが。なぜかというと、私にとって、あなたの書いた言葉は、妙にしっくりきていたのです。あまりに私にぴったりで、だから、私はあなたの言葉に違和感を覚えなかった。だから、やっぱりあなたの言葉は個性的だったはず、だって、私が普通と違っているのだから。

私の何が他人と違うというのでしょうか、それは、私にもよく分かりません。でも、私は、普通の人が普通に使っている言葉を上手く喋ることができません。以前は、そうではありませんでした。普通の人として、普通の人と同じような言葉を使い、普通の枠に収まった人生を送ってきたのです。大学を出て、会社に勤め、そんな生活を三年ほど続けていたのです。

それが、ある日、そこからころころと転げ落ち、二度と戻れなくなってしまいました。私、急に、言葉が喋れなくなってしまったのです。嘘みたいな話ですが、突然、そんなふうになってしまいました。朝起きて、なんだか喉にフタがされているような違和感があったのですが、そのまま会社に行きました、そして、同僚と話をしようとして、そこで初めて声が出ないことに気づいたのです。頭の中も、真っ白でした、言葉という言葉、全て忘れてしまったかのように、何も浮かんでこなかったのです。

そうなる、普通の人、普通の生活が送れません。会社も辞めることになりました。それから一ヶ月、何をどうしていいのかわからず、誰とも話すことができず、言葉の無い世界をさまよ

うように、毎日毎日散歩ばかり。そんな日々の中で、あなたの本に出会ったのでした。

私は驚きました、あなたの本を読んでいる間、私の頭の中に、私の言葉が浮かんでいたのです。急に、病気が治ったのだろうかと思いましたが、どうやらそうではありません。何度か、あなたの本を開いては閉じ、読んでは止め、そうやって、気づいたのですが、私はあなたの本を読んでいる間だけは、私の言葉を取り戻しているらしいのです。

なぜ、なぜ、と、私はいくらか考えてみましたが、答えはさっぱり分かりません。ただ、妙に、あなたの言葉は、私にとってしっくりきてしまうのです。この手紙を書くことができているのも、あなたの本を読んだ直後だからに他ありません。

だから、私、あなたに仕事を依頼してみようと思ったのです。もしかしたら、言葉を取り戻せるかもしれない、そんな、一抹の期待も胸に秘めて。詳しい内容は、直接会ってお話しさせていただきたく思います、というか、私自身、まだ、はっきりと内容を決めているわけではないのです。あなたにどんなことをしてもらえれば、私は言葉を取り戻せるというのでしょうか。何か妙案があれば、あなたの意見もお聞きしたいと考えております。

お返事お待ち申し上げます。ただ、電話ではしゃべれない可能性が高いので、メールでお返事をいただければと思います。わざわざ手紙を書くのはお手数でしょうし。

それでは、ぶよぶよした湿気と盛り始める暑さの折、どうかご自愛くださいませ。

敬具

何なんだこれは、と思いながら僕はきれいな字で書かれた二、三度手紙を読み返す。普通の依頼ではないというのはもとより、これから何をすることになるのか未定だという。突然言葉が喋れなくなった？　それで、僕の本を読んでいる時だけは言葉を取り戻せる？　全く不可解な話だ。自分で世に送り出しといてなんだけど、僕は自分の詩集がそんなに優れているとは思っていない。古本屋のワゴンセールで十円というのも、さもありなん、どこかの暇人がたまたま手にとって読み捨ててくれたらいいや、というくらいの気持ちでいる。どこかの見知らぬ奇病にかかった妙齢の女性が、それに救いを見出すというのは、おおよそ考えもしないことだった。

それにこの女性、いくらか個性的な文章を書く。字のクセも結構強い。全体的に丸みを帯びているのだが、妙に迷いのない線で構成されている。あるいは、「す」の払いが直線的で長かったり、「も」の先がくるんと羊の角のように巻いていたり、一つ一つの字もよく見ると面白い個性を持っている。本人は普通の人間として生きてきたと語っているものの、たぶん、どこか世の中からずれてしまう部分をもともと持っていたのではないだろうか。多少なりともその自覚はあるようだけど、本人が思っているよりも、もっと強いものを抱えている。ときどきこういう人はいる、普通の生活を送ることが本当は困難なのに、無理に自分をそこに押し込めてしまうのだ、そう、かつての僕のように。僕も自分を凡人だと思い、自分を「社会」の中へと押し込んだのだけれど、いくぶん負担が大きかった。「彼女」も、同じような人間なのではないだろうか、自覚のないままに、自分を押し込み続け、気付かないままに、ガタがきてしまった。

もちろん、これは憶測でしかないわけで、実際に「彼女」に会ってみたい限りはなんとも言えない、実際に会ったところでそれがはっきり分かるかどうかは保証はない。それに、僕がこういう人に対してできることなどあるのだろうか。僕のような数奇者ではなく、心療内科だとかでカウンセリングを受けてみるほうが良いのではないだろうか。などと思いつつ、ただ、僕を頼ってきてくれているわけだし、ムゲに断るのもなんだかなあという気持ちもある。

とりあえず、話だけでも聞いてみよう、というのが僕の結論だった。話からして、僕の手には負えなければ、そいつは無理ですね、とむにやむにや言い訳をこねて逃げることもできるはず。

もっとも、この手紙を読んだ僕は、「彼女」に興味を持っていたのだった。僕の本を読んでくれて、しかも僕の本を必要としてくれる、奇特的な読者に会う機会など、この先ありそうもない。それに、僕は「彼女」の書く文章が好きだった。僕は、依頼とか仕事とか関係なく、「彼女」に会ってみたいかったのだ。

*

「彼女」は、じっと窓の外を見つめながら、そこに座っていた。レースの入った真っ黒いワンピースを着て、これまた真っ黒いつば広のキャペリンをかぶっている。服を着ている人間というより、服に収まった人形のように、その容貌にしる肌の質感や色にしる、奇妙なほどの透明感を持っている。その存在についての現実感が希薄で、僕は一瞬、本当にカフェの片隅にマネキンが置いてあるのかと思ったほどだ。つやつやした木製のテーブルの横で、エッグチェアにもたれた姿は、そういうちょっと変わったコンセプトのインテリアなのだというふうにも見えてしまう。

「あの」

声をかけると、「彼女」はすうっと向き直って顔を上げた。意外にも視線は強く余裕があり、ベルト・モリゾの肖像画を思い起こさせる。真っ黒い服装とコントラストを描く、ヘーゼル色の瞳は美しく、大きなガラス窓を通して入ってくる陽光のせいできらきらと光っていた。ただ、唇は軽く動きかけた状態のまま止まって、浮かぼうとする言葉が舌先ではかなく溶けていってしまうのが見えた。ああ、そういえば、「彼女」は喋ることができないのだな、と僕は思う。

「あなたが手紙を――」

僕の言葉をさえぎるように「彼女」は無言のままうなずき、同時に、ややぎこちない動きで手のひらを差し出しながら、席をすすめてくれた。その手には、やはりレースの入った、真っ黒い手袋をしている。服装はとにかく黒、黒、黒、で統一されている、ほとんど葬儀に来た貴婦人がゴスロリみたいだし、世間の人々からは多少ジロジロと見られてしまうであろう奇抜な格好なのだが、「彼女」の着こなすには妙に品があって、良く似合っていると僕は思う。率直に言って、僕はそんな「彼女」に好感を持った。

.....

まあ、ひどいもんだ。女子校と男子校出身の人見知りいきなり正面きってお見合いさせたかのように、僕と「彼女」はしばらく何も喋らなかった。当然のことながら、「彼女」は全く喋らない、店員が注文を取りに来て、無愛想に黙ってメニューを指さすだけで、目を合わそうとすらしなかった。最初、僕は二言ないし三言と投げかけてみたが、「彼女」は何も言わず、うつむいて、これもやはり真っ黒いブラックコーヒーを意味なくスプーンでぐるぐるかき混ぜていた。何かを考えている様子であって、何かを喋ろうとしている様子ではない。言葉を失ったというより、対人恐怖症なのではないかと思ってもみたが、「彼女」の態度はとても落ち着いていて、僕の存在に怯えたりしているわけでもなさそうだった。

「手紙、読んだ時思ったんですけど、文章、個性的ですよ。僕、けっこう、好きでした」
やむにやまれず、そんなことを言ってみる、すると、「彼女」は顔を上げ、僕を見た。スプーンをぐるぐる回す手を止めて、不思議そうに、僕の目をじっとのぞき込んでいる。ヘーゼル色の瞳は、やはりきらきらしている。窓ガラスの向こうにあるテラスで、バナナの木の大きな葉っぱが、風で、ふわふわと揺れていた。

「あの、やっぱり喋れないんですね.....」

そう言って、僕はカバンから二冊のノートと二本のペンを取り出す。たぶんこういうことになるだろうと思って、筆談の準備をしてきたのだ。僕は、ノートとペンを一つずつ「彼女」に手渡そうとする、ところが、意外にも、「彼女」は手のひらをぐっと僕の目の前に突き出して、「いない」という意思表示をしてみせる。

「でも、これがなきゃ会話ができませんと思うんですが」

「彼女」は首を横に振る、うつむいて、ゆっくりと、やや深い呼吸を二、三度繰り返して、最後に大きく息をはくと、今度はおもむろに、つば広の真っ黒い帽子を脱ぐ、寝ぐせのように立ち上がった髪の毛をぽんぽんとなでて整え、瞳と同じヘーゼル色の髪の毛を手ぐしで梳いてから、ぴんと背筋を張ってイスに座りなおし、そして、もう一度だけ深呼吸。

「.....大丈夫、喋れるから」

今度は僕が黙ってしまった。「彼女」は喋れないのだという前提でここに来ていたし、大人びた風貌とはギャップのある、高校生の女の子みたいな声にも一瞬戸惑った。ただし、子どもっぽいのではなく、口調はとても落ち着いた感じだ。「彼女」は、また、僕の目をのぞき込んでいる。

「いや、全然喋れないのかと思ってたから、驚いた」

「普段はね。私、この一ヶ月以上、全然喋らなかった」

「誰とも？」

「誰とも」

「どうして？」

「手紙で書いた通りなの。あなたの本を読んでいる間は、言葉が頭と口に浮かんでくるけど、普段は全然。今は直接話してるから、それと同じこと。一ヶ月ぶりだから、喋るってどんな感

じだったか忘れてたけど、今はもう大丈夫」

一ヶ月ぶりに喋れたのならもっと感動していてもよさそうなのだが、「彼女」の性格なのか、口調はとことん淡々としている。

「カウンセリングとか、考えなかった？」

「全然」

「何で？」

「だって、病名付けられたくないし。私、別に、自分が病気だと思ってない。無理に病人にされるのなんて、いや」

やっぱり変わってるなあ、と僕は思った。病名を付けられるのが嫌だなんて、他の人とは言う事が違う。たいていの人間は、むしろ病名を欲しがるのに。

少しまた、沈黙があって、「彼女」はその度にスプーンで真っ黒いコーヒーをかき回す。

「人と話すと、落ち着かなくなるの？　というか、やっぱり一ヶ月ぶりっていうのも、あるのかな」

沈黙の間、ずっとそわそわしたままの「彼女」に聞いてみる。

「そうじゃない、何ていうか、黙っていると、そのまま言葉が頭の中から蒸発して消えてしまいそうな気がするの」

「本当に、僕以外の人とは喋れないってことなんだ」

あまり愉快ではなさそうな顔で、「彼女」はその問いにうなずく。何でだろう、と僕は質問してみようと思ったが、やっぱり止めておいた。「彼女」がその答えを持っていないことは明らかだったし、何よりデリカシーにかける気がした。

「.....それで、依頼のことなんだけど」

「彼女」が黙ったままなので、こちらからその件を切りだしてみる。しかし「彼女」はやはり黙ったままにいる、頬杖をついている、そして、僕をじっと見たままにいる。

「具体的に、何をしたらいいんだろう」

僕は、ほとんどひとり言のように投げかけてみる。「彼女」にもそれは分からないようだったし、もちろん僕にも分からない。

「何をしたら、いいんだろうね」

「彼女」は考えている、うつむいてはいない、顔を上げて、スプーンでコーヒーをかきまぜる手は止まっている。

「君に向けて、詩でも書いたらいいんだろうか」

「そういうのじゃないんだよね」

無表情で、「彼女」が手を振って僕の提案を拒む。たぶん、「彼女」なりの素直さのせいなのだろうが、救いがないほど返事がそっけない。何だか、僕がイタイやつだったみたいで恥ずかしくなる。

「難しい話だよ、そもそも、僕は君のことを何も知らない。何が好きだとか、普段は何をしているんだとか、今まで何の仕事をしていたんだとか、あと、名前だってまだ聞いてない」

「そういうのも、今は別に知る必要はないと思う」

再び、「彼女」手を振って答える。

「お手上げじゃないか」

僕は両手を上げて、そのまま、頭の後ろで組んでイスの背もたれに体重をあずける。とりつく島もありゃしない、いったい、こんな状態で何ができるんだ。

「怒ったの？」

「そうじゃない」

僕の返事の口調は、やや強めだったかもしれない。別に怒っていたわけじゃないけど、あまりにつかみどころがなく、しかも非協力的な「彼女」の態度に、ちょっと投げやりな気分になってしまったのだ。

「ごめん、悪気はないんだけど。私、自分自身のことについて、喋るのが好きじゃないの」

「言葉を失ったせいで？」

「違う。ずっと前からそう。自分自身について語ってしまうと、それがいったい誰についての言葉なのか、分からなくなるの。私っていう主語で、私が私について語ると、それが全部、嘘のような気がしてくる」

「自分の名前ですら？」

「自分の名前ですら、ね」

「何か、面白い人だね、君って」

「彼女」は、またじっと僕を見つめる。癖なのだろうか、微妙にピントをずらしながら見つめているので、まるで呼吸をしているかのように、瞳がときどき揺らいでいた。

「怒った？」

「そうじゃない」

常に変わらない冷静さと無表情のまま、「彼女」は肩をすくめる。

「まあ、せめて糸口は欲しいと思うんだよね。僕が、いったい、君のために何ができるのか、とにかく考えないと」

「うん」

子供みたいなしぐさで、「彼女」はうなずく。良くも悪くも、とても素直な人なのだ。きっと、その分、誤解されることも多いのだろうと僕は思う。

「君は、仕事をしていたけど、ある日、急に、喋ることができなくなった」

「そう。ちなみに、書くこともできなくなった。頭の中に、まったく言葉が浮かばないの」

「何か、きっかけになることは？ 仕事で嫌なことがあったとか、プライベートなことで悩んでたとか」

「特に、何も」

「何も？」

「特に思いつくことなんかない。仕事は良くもなく、悪くもなく。忙しい仕事だったし、プライベートでの出来事なんか特になかった」

「忙しいことについては、特に問題はなかったの？」

「まあ、プライベートでやりたいことなんかなかったし。ある種のエリートコースみたいな企

業で働いてたから、比較的男女平等でフラットな文化だったし、給料もかなりよかった。特に不満を持つようなこともなかった」

「外資系みたいな？」

「そういう系統ね」

相変わらず無表情で答える「彼女」を、僕は少し観察してみる。黒ずくめの、ある種エレガントな装いで、厭世的な、アンニュイな雰囲気のある、寡黙——というか喋れない——な女性。エリートキャリアウーマンというより、世をはかなんだ令嬢といった感じだ。ふと、別れた恋人のことが頭をよぎる、専業主婦志向で愛想の良いユミと「彼女」とは、正反対だと僕は思う。ついでに、上意下達で男尊女卑、薄給で年功序列な役所で働いていた僕とも正反対だ。

「自分でも意識していない問題を抱えてたとか？ 表面的には満足してたけど、心の奥底ではそうじゃなかったってところはないのかな」

「さあ。そんなこと言いだしたら、誰もが自分の人生に完全に満足しているわけないし。それは、誰にでも当てはまることじゃない？」

「確かに。じゃあ、僕の本を読んだ時だけ言葉を取り戻せることについてはどう思う？」

「それもよく分からないけど、ただ、ときどき、妙にじっくり来る本ってあると思うの。小説だと、まるで自分のことを書いてるみたいだって時もあるけど、あなたの本の場合はもう少し違って、まるで自分が書こうとしている文章みたいだっていう感じだったの」

「君にそんなふうに思ってもらえる内容だったかなあ」

僕は、その本に収められた詩の内容を思い出してみる、それは僕の個人的な感情や考えをつづったようなもので、「彼女」みたいな人に共感してもらえるものではとうていなかったはずだが。

「内容がどうこうっていうより、文章ね。文章の呼吸っていうか、そういうもの。さっき、私の文章が個性的だって言ってたけど、あなたの文章は、もっと個性的ね」

「そうかなあ、自分ではよく分からないけど」

「私にもよく分からない。でも、妙にじっくり来たってわけ」

「それじゃあ、君に文章の書き方でも指南したらいいんだろうか」

「それもちょっと違う感じね」

そっけない返事をして、「彼女」は首を横に振る、そして、しばらく何かを考えている、僕は、その様子を見ながら、何か新しい言葉が出てくるのを待っていた。

「……あなたは、誰かの代わりに、ものを書いている」

「まあ、そういう仕事だね」

「私も、何か書いてもらおうかな」

「何がいいんだろう」

「彼女」は、何か考えているそぶりを見せる、しかし、実際には、もう答えを持っていたはずだけれど。

「じゃあ、日記なんてどう？」

「日記？」

「そう、私の日記を、私の代わりに、あなたが書くの」

難しいなあ、と僕はうめくように呟いて腕組みをする。日記というのは、手紙やスピーチとは違っている。手紙とかなら、おおまかな内容や相手や目的がはっきりしているので、後はそれらの条件を上手にクリアできるように、パズルを組み立ててやればいい。でも、日記というのは、そういうのとは違って、自分のために書くもので、そもそも人に代わりに書いてもらうなんて言う性質のものじゃない。目的から言えば、矛盾はなはだしいということになる。

「別に、難しく考えなくていい。あなたが、思うように、私の日記を書けばいいの」

「そうは言っても、そういうとても個人的なものを、他人が代わりに書くなんて、上手くいきそうもないよ。こんな仕事をしているのになんだけど、根本的には、他人の代わりに何かを書くなんて不可能だ。手紙を代筆するときですら、僕は多かれ少なかれ失敗しながら書いてると思ってる。ましてや女性の日記なんて！ 往々にして、特に男性というのは、女性のことを書くのが極端に下手くそだ。男性作家の描く女性なんて、ほとんどみんな違和感があるだろ？ 頭の中で都合よく創り上げられた女性像を、子供みたいに自分の箱庭で動かしてる。女性のことなんか、まともに見てやしないし、理解しようともしていない。きっと、僕の日記もそうなるよ」

「そういうことを考えられるだけ、まだましじゃないの」

「上手くできないからこそ、よく分るのさ」

「やってみてよ、これは仕事の依頼なんだし、完璧なクオリティなんて求めてないから」

また腕組みして、ううん、と僕は煮え切らない返事をかえしてしまう。

「ちょっとした実験だと思ってくれたらいいの。紀貫之みたいで面白いじゃない？ 『土佐日記』ごっこみたいな感じでやろうよ」

僕は、『土佐日記』ごっこという言葉の無理矢理な感じが面白くて、ふき出してしまう。「彼女」も笑っていた。普段は無表情なのに、笑うときは遠慮無く表情を崩していて、とても自然だった。

「それでも、他人の日記を書くんだから、難易度はそれ以上だよ」

「何度も言うけど、面白がってやってくればそれでいいの。私も、興味あるし。日本語の散文の嚆矢がそんな感じなんだし、日本語で書くっていう行為の根底にはそんな要素もあるってことじゃない？」

「まあ、やるとしても、一つ問題があると思うんだけど」

「何？」

「日記ということは、君の過ごした一日を書くわけだよ。でも、まさか僕が君に一日中つきまとうわけにもいかない」

「別に、つきまとったらいいじゃない」

「え？」

「初めっからそのつもり。しばらく、私と一緒にいてもらうわ」

「同棲でもするってのかい」

「彼女」は首を横に振って、おいしい、と言う。何だか楽しそうだ。

「じゃあ、いったい……」

「旅行、一緒に行こうよ、明日から」

「は？」

僕は、マンガみたいなぽかんとした顔で「彼女」を見る。「彼女」はますます楽しそうに、マヌケ面の僕を見て、うふふと笑う。ここでおかしいのは「彼女」であって、僕ではないはずだ。いきなり呼び出された女の子に、明日から一緒に旅行に行きましょうと誘われるなんて、しかもこれは仕事の依頼だからお金ももらえるわけで、こんなのできの悪い迷惑メール並みの話じゃないか。

「どっかに行きたいの、でも、別に一緒に行く友達もいないし、だからあなたに付いて来てもらおうかなって。報酬もはずむよ。さっきも言ったけど、私、給料の高い仕事に就いてたから、貯金はたっぷりあるの。ねえ、やるでしょ、この仕事？」

何が何だか、わけも分からず、僕は、うん、と首を縦に振ってしまう。唯一、直感的に分かったのは、「彼女」が別に僕を騙そうとしているわけではないということだけだった。ちょうど生活費の底も見えていたし、実質、選択の余地などなかったのだが。僕の返事を聞いて、「彼女」は、よっしゃ、と言って軽くガッツポーズをして喜ぶ。喋り始めの重々しい空気はどこへやら、今はまるで、マイペースな女友達の提案に強引に巻き込まれているような気分だ。僕に慣れてきたせいだろうか、それとも、喋ることに慣れてきたせいだろうか、「彼女」の表情はとても自然だった。しかし、一方で、その奥にある翳りのようなものが、決して消えたわけではない。楽しんでいるようで、反面、努めてそうふるまっているような気もする。

レジでお金を払う間、「彼女」は物憂げな表情に戻り、全く喋らなかった、僕の背中に隠れるように立ったまま、店員の目など見ようともせず、ずっと、意味なく、つば広のキャペリンの下から、まるで警戒心の強いヤドカリのように天井の照明を見つめていただけで、全てを僕にまかせてしまっていた。僕以外の人間とは喋れないのだから、それも無理もないことなのだが。

結局、僕は「彼女」のことは何一つ分かっていない。そんな「彼女」と、僕はこれから旅に出ることになってしまった。はてさて、いったいどうなることやら。

どこへ行こう、と「彼女」は言う。相変わらず驚かされることばかりだが、「彼女」は当日になってもはっきりと行き先を決めていなかったのだ。まさかそんな無計画とは思ってもみなかった僕は、さあ、と首を傾げる、そんなにとっさに、旅行先なんて考えつくもんじゃない。人、人、人の行き交う大きな駅の真ん中で、僕と「彼女」は、しばらく、突っ立ってお互いの顔を見たままでいる。

「じゃあ、京都にしようか。ベタだけど」

さも適当に決めましたという感じで放言した「彼女」は、僕の同意も取らずにキャリーケースをしもべのように引っ張って歩き始める。ちなみに、今日の服装も昨日と同じ黒づくめ、しかもキャリーケースもやはり真っ黒だ。しょうがないので、僕はバッグを背負って、帽子を押さええながら歩く「彼女」の後ろを追っかけた。

新幹線で移動している間、僕と「彼女」は全く喋らなかった。僕の隣、窓側の席に座った「彼女」は、ただただ、無表情で車窓の景色を見流すばかりでいる。僕も何をするでもなく、じっと天井を見つめているありさまだ。僕と「彼女」の頭上、荷物棚には、キャリーケースとバッグ、そしてその上には、例の帽子が乗っかっている。まるで、スカートを広げた彼女の分身がそこにいるように見えてきて、横にいる本物の彼女と帽子を見比べ、何ということもないのにニヤニヤしてしまう。そんな気配に気づいたのか、いつのまにか「彼女」が僕のニヤケ顔を見ていた。僕は照れ隠しにおどけた表情を作ってみせたが、「彼女」は全くどうでもよさそうに、また窓の外へと視線をやる。少し、固い表情になっているようだった、何か、深刻な秘密を隠していて、それについて考えているような。僕は、とりあえず何も聞かないことにする、まあ、こんな境遇なのだし、悩み事ないし考え事も多いただろう。これから「彼女」の日記を書くことを考えれば、多少の会話は欲しいところではあるけれど。とはいえ、僕は「彼女」に買われている存在なわけだし、基本的には「彼女」の好きにさせるべきだろうと思い、僕は黙ったまま目を閉じ、しばらく眠ってみることにする。見ず知らずの女性といきなり旅行に行くなんていうのは結構な緊張をもたらすもので、あまり眠れてないのだ。新幹線の中のリラックスした空気に誘われるまま、眠りは思いのほか早く訪れる。まっ暗い闇が覆いかぶさってくる、僕は、まるで、「彼女」の帽子の中へと、ゆっくり飲み込まれていくような心地がしていた。

*

「良かった、思ったよりいい旅館で」

部屋の外にある小さな庭を前に立ち、「彼女」が呟く。緑にぎやかな初夏の庭に、ピンク色のアジサイが鮮やかで、「彼女」はじっとそれを眺めていた。アジサイは、おしゃべりする年頃の

娘たちのように、かすかな風に揺らぎながら明るい輝きをふりまいている。僕と「彼女」は淡い陰の差す部屋の中で、二人ならんだまま、外とは対照的な静けさの中にたたずむ。

「いつの間に予約したの？」

京都駅に着くなり、寝起きの僕は、ほとんど引きずられるように「彼女」に案内され、この旅館に着いたのだ。「彼女」はスマホ片手に、まことに手際よくアクセスを調べ、迷うことなく目的地に到達してみせた。

「あなたが寝てる間。スマホ使えば簡単にできることだし」

「まあ、ずっと眠ってもんね」

「いびきかいてたよ。でっかいヤツ」

「ホント？」

「ウソ」

「なんだよ」

僕のその言葉に、「彼女」は小さく笑みを浮かべて返すだけで、何も言わない。庭の方を見たまま、もの思いにふけている。外は眩しいくらいに明るかった、気温は三十度近いが、風が入ってくるので、僕としては心地良いくらいだ。「彼女」の口数は少ない、昨日出会って、ようやく話し始めたときに戻ってしまったかのようなようだった。濡れたガラス玉のような目で、近くとも遠くとも言えないところを見つめ、何かを考えている。今日ずっとこんな感じだったら、僕はいったい何を日記に書いたらいいんだろうと思う、「彼女」が何を考えているのかを考えてみるが、見当もつかず、僕はあきらめたように「彼女」が眺めている庭を眺めていた。

「京都、来たことあるの？」

「ううん」

僕の質問に、「彼女」は首を横に振って答える。ようやく旅館を出て、バスに乗り、二人掛けの席に収まり悪く、僕と「彼女」は座っていた。「彼女」はまだ考え事をしているような雰囲気だったが、互いの距離が近いせいか、いくぶんかは話しやすくなった気がする。

「あなたは？」

「あるよ」

「一人で？」

「いや、前に付き合ってたコと一緒に」

ふうん、とうなずいて、別に興味もなさそうに、「彼女」はバスの窓から景色を眺める。古い日本家屋と背の低いビル、小さいフランチャイズ店、カフェや美容室が並ぶ通りを、バスが走っていた。反対車線の歩道沿い、原色のオレンジのヘルメットをかぶった女の子が乗る原付が横切っていくのを、「彼女」は目で追う。

「なんで別れたの？」

特に気を使う様子もなく、「彼女」が質問する。妙に自然な聞き方なので、僕もごく自然に受け止めてしまう。

「僕が仕事辞めたから」

「あら、そうなの。ひどい女だって思った？」

「全然。まあ、そういうことになるって予想してたし。金を稼げないってことに加えて、経済が縮小してる時代に、次のあてもなくせにせっかく手にした仕事を捨てるなんていう無計画さにあきれたんだと思うよ」

「たぶん、それだけじゃなくて、そういう悟ったような態度を取るかわいげの無さも原因じゃないかと思うけど」

「……悪かったな」

「ごめん、私、正直だから。悪気はないんだけど」

まあ、確かに正直な性格なのだろうと思う。「彼女」のそういうところについて、僕は全く不快には感じなかった、というか、むしろ好感すら持っている。「彼女」は、嘘っぽさのない人だった、そして、もしかしたら、そういう正直さのせいで世の中と折り合いがつかず、言葉を失う原因になったのだろうか、と僕は考えてみたりする。不思議といえば不思議なのは、そういう率直さにもかかわらず、「彼女」は謎めいていて、つかみどころがないということだ。芯があるように見えるのに、一方で、ふわふわと漂って、居場所の定まらない雰囲気を用意している。

「そっちは？」

「何が？」

「最近の恋人の話とか、ないの？」

「ない」

「僕ばっかりに言わずなよ」

「ホントにないし。人並みに何人かと付き合ったことはあるけど、ここ数年はさっぱり」

「仕事一筋だったってことか」

「というより、ずっとそういう気分じゃなかった。恋愛が性に合わないのね、きっと」

「いい相手にめぐり逢えないってことじゃなくて？」

「本気で探してたら、それなりに納得のいく相手の一人や二人見つかるんじゃない？ 少なくとも、チャンスくらいはね。だけどそんなんじゃない、何人か付き合ってみて気づいたの、私、そういうの、性に合わないんだって。デートとか行っても、これは何なんだろうって思っちゃうの、結局、全部が空疎な儀式みたいにしか見えなくなる。目的ないでしょ？ 目的ないのが良いってことなんだろうけど。イヤな女って感じでしょ、でも、私、そうなの。相手も楽しくないだろうけど、何より、私が楽しめない」

「性欲は？」

僕は、自分でも思ってもみなかったほど率直な聞き方をする、「彼女」も、一瞬黙って僕の顔を見た。

「いや、君の性格からいって、ストレートな質問のほうがいいのかなと思って。答えたくないなら答える必要はないよ、もちろん」

「変な人ね、あなたって。私も変だけど」

「そうだね、僕はずっと自分を普通の人間だと思ってたけど、最近、ようやく自分が変人だっ

てことに気づいた。それで、仕事も辞めたってわけだね」

「まあ、変人のほうが楽だし、楽しいけど」

「全く同感だね。僕は、凡人でいた今までの二十数年間が無駄な人生だったような気すらしてくる。変人であるほうがブレなくていい、自分の考えたいことを考えて、したいことができるんだ。女にはフラれたけど、今のほうが楽しい」

「お互い、他人と一緒にいるのは難しい性質みたいね」

「お互い、変人だしね」

そこで、僕と「彼女」の会話が一瞬途切れる。そのまま二人で前を向いていた。僕は、目的地までのバス停の数を数え、サイフの中の小銭を確認する。

「ちなみに」

「え？」

「あるよ」

「何が？」

「性欲」

ずいぶんはっきりとした「彼女」の答えっぷりに、僕は自分で質問しておきながら周囲に会話が聞こえてないか心配して、急にキョロキョロしてしまう。その狼狽ぐあいが面白かったらしく、「彼女」が僕を指さして笑い出す。

「からかうなよ」

「でも、ホントだし」

「どうやって処理してんの？ 適当に相手になる男を見つけるとか？」

「あなたと同じ。自分で処理してる。愛ってほどじゃなくても、相手になんらかの感情的な愛着がないと、男の体重を受け止めるのは苦痛ね。でも、私はおかしい人間で、そういう感情が持てそうにない、ただひたすら窒息しそうになる。たいして快感もない。だから、一人で上手く処理できるようになったほうがマシ」

「それは結構だけど、なんで僕が自分で処理してるって言い切れるんだよ」

「さあ、でも器用に女を引っ掛けるようなタイプじゃないよね。そういう人って、相手が警戒してても一気に間合いをつめちゃうから、それで、そういうのが上手いのね。でも、あなたはずっと間合いをキープしてる。女性を尊重してるけど、恐れてもいる。だからナンパが得意なタイプじゃないなって」

「そういうもんかね。確かに凶星だけど」

「まあ、私、そういう人のほうが好きだけど」

そう言いながら、「彼女」が前を指さして合図する。バスが、目的地まで着いたらしい。僕は財布から小銭をつかみ出して、ジャラジャラいわせながら立ち上がると、やや混んでいる車内の人をかき分けて、降車ドアへと向かう。その僕の後ろを、帽子を胸の辺りに抱いた「彼女」が付いて来ていた。

*

できる限りのベタがいい、という「彼女」の要望で、やって来たのは金閣寺、僕は周囲の観光客からは控えめな位置に立って、池の向こうに浮かぶ金閣を眺めていた。入場券を買うとき、人と喋れない「彼女」はやはり僕の後ろに隠れてじっと宙を見つめていた。こういうときの「彼女」は、まるで用心深くふてぶてしい猫のようで、できるだけ安全な間合いをキープしながら、興味ない素振りでその実、他人をじっくり観察しているのだ。

特に感慨もなさそうに、「彼女」は金閣を眺めている。入道雲のように膨らむ緑を背景にして池に浮かぶ金閣は、夏の強い光のせいでてらてら輝き、ずいぶん派手ないでたちをこれでもかと誇ってそびえているように見える。

「足利義満だっけ？ これ建てたの」

しばらく会話がなかったので、僕は割とどうでもいいことを聞いてみる。

「そうよ。でも、その前は別のお寺が建てたみたいだけど。その所有者の公家が後醍醐天皇を暗殺しようとしたんだけど、結局失敗して、そのせいで没収されちゃったみたい。それで、後でこの土地を手に入れた義満があれを建てたのね」

「よく知ってるね。歴史好きなの？」

「違う。新幹線の中で調べただけ」

「なんだよ。ずいぶん博学ぶった喋り方だったから、そう思った」

「別に十年前に得た知識も当日に得た知識も大差ないし。でも面白いでしょ、そんな裏話があるなんて。なんか奥底に眠る怨念みたいなものがある気がして、あるいは忘れられた潜在意識が今もそこでうごめいてる気がして、それで、ベタな所だけど来たら面白そうかなって」

「確かに面白いかもしれないけど、ちょっと聞こえは趣味悪いな」

「そうかしら」

そう言って、「彼女」は被った帽子を押さえながら笑った、楽しそうというよりは、どこか寂しように。

控えめな位置に立つ僕と「彼女」の目の前を、他の観光客たちが通りすぎていく、ほとんどみんなが、同じように、池の際に立ってふた言み言交わしてからスマホのカメラで金閣の写真を撮り、そして満足した顔で歩いて行く。

「なんで、みんなあんなに写真撮りたがるんだろう」

その観光客たちを見送りながら、「彼女」がぼつりと呟く。

「だいたいそんなもんじゃないの、みんな。最近は特に、SNSとかで共有したがるし」

「でも、あなた写真撮る？ 私は全然撮らないんだけど」

「僕も撮らない、けど、みんなはそんなもんだと思ってる」

「みんな、ろくに目の前のものを見てないでしょ。見に来るんじゃなくて、撮りに来る、つまり、めずらしい物、自分の日常の外にある物を、自分の手の中に収めたがってる。それが非日常的であるからこそ、撮るんじゃなくて、見ないといけないのにな。それが、自分の世界とは切

り離された場所に存在しているということが、みんな不安なの、それで、写真を撮ることで安心しようとするし、安心できると思ってしまう。でも、自分の外にあるものは絶対に所有できない、それが不可能だって気づくことを避けてる。みんな子供なのね。この世の中に、自分が本当に所有できたり支配できたりするものなんて、一つも存在してない。でも、子供だからそれが分からないの」

「赤ん坊は、気になるものをじっと見てるけどね」

「撮るっていう手段がないからね、赤ちゃんには。だから、できるだけ見ようとする」

「そこで、そういうことに気づいてもよさそうなもんだけど」

「それに気づくっていうのは、自分が世界から切り離されて、ぽつんと存在しているだけっていう事実に気づくということでもあるから。受け入れがたいでしょ、そういう認識って」

「君は、他人より超然としてしまってるところがあるからね。そういう所に気づかないほうがみんな生きやすいんだと思うし、逆に君は独りであれこれもの思いしてしまうなんてことになるんじゃないだろうか」

ちらりと、「彼女」が僕を見る。顔は帽子の陰になっているが、強い日差しのせいで瞳は透き通っている。ろくにメイクもほどこしていない、まるで人形のような肌に、かすかに汗がにじんでいた。

「あなたも似たようなもんだと思うけど。あなた言ったでしょ、自分は他人の代わりにものを書いてはいるけれど、ホントはそれは不可能なんだって。そういう考えかたをするのは、その認識を持ってるからだよ」

僕はついさっき、悟ったこと言うような可愛げのなさがユミにフラれた原因じゃないのか、と「彼女」に言われたことを思い出して、なるほど確かに可愛げがない態度だ、ただしそれはお互い様じゃないか、と考えながら、悟ったようなことを言っている「彼女」に向かって肩をすくめてみせる。

「まあ、少なくとも……」

「少なくとも？」

「僕らはあんまり、世の中で上手くやっていける人間ではなさそうだ」

「そうね」

「彼女」はまた、例の寂しげな表情で笑う。「もう行こうよ」、そう言って、「彼女」は手を添えて帽子の位置を直すと、出口の方へと歩き始めた。僕はそこに立ち止まったまま、携帯電話――スマホじゃない――を取り出し、歩いて行こうとする彼女の背中にカメラを向け、金閣をバックに一枚写真を撮ってみる。燦燦として燃える景色の、緑と黄色の中で、ポタポタと垂らした墨の滴のような「彼女」の姿、その景色の中の、違和感そのものである姿。僕は首を傾げる、そして写真を消す。僕も「彼女」もみんなと違って写真など撮らない、「彼女」はそれに説明をつけてみせる、僕はそれに納得したような、していないような、そんな、中途半端なままだ。僕も「彼女」も、人々の生きる世界から大きくズレてしまっている、けど、そのズレの正体はつかめない。写真撮影についての「彼女」の説明は、そのズレについての説明の一つの種類でもある、「彼女」はその正体をつかんでみせようとする、でも、僕がそうであるように、「

彼女」もその説明に納得してみせることはできないのだ。僕と「彼女」は、その違和感を解消すること叶わず、ズレている、ズレ続けて、それが当たり前になって、生きにくい。そのズレについての説明なんているの？ という疑問を持つ人もいるだろう。それについては、「いる」というのが正解だ。世の中には、ズレていないからこそズレたがる人間と、始めからズレてしまっている人間がいる。ズレたがる人間は説明のつく範囲で遊んでいればいいのだが、僕や「彼女」のように始めからズレてしまっている人間は、どういう形であれ、その説明のつかないズレについて、やはりどうにか説明をつけるしかない。言葉で、論理的に、という説明である必要はない、だが、どういう形であれ、説明は不可欠だ。僕と「彼女」のような人間にとっては、生きることそのものが脅威であり不条理だ、だから、何を使ってもいい、ときには芸術としてもあるような、そういう説明を盾にしなくてはならない。人間が、野放図な不条理に、耐えられるはずはない。

「どうかした？」

気がつくやうに、振り返った「彼女」が、そこで動かずにいる僕を見ていた。きっと、「彼女」は、そのズレを前にして、今、とうとう立ちゆかなくなってしまうている。裸のまま、その不条理にさらされながら、どうすることもできない、だから、僕に助けを求めている。かといって、いったい僕に何ができるというのだろうか、僕自身のズレですら、上手く解決できていないというのに。

「いや、何でもないよ」

手に持ったままの携帯電話をしまって、僕は「彼女」を追いかける。少なくとも、僕が出来る範囲で何とかしてやりたい、正直な気持ちとして、そう思っている。書いてみようじゃないか、とりあえず、「彼女」の依頼する、その日記とやらを。

*

六月、二五日。

京都へ。

行き先は決めていなかった。日記を依頼した「彼」と一緒に、とりあえずどこかへ行く、そう決めていただけだった。

その場で行き先を決め、あきれている彼を引き連れるように、新幹線に乗る。西へ、五百キロ、二時間と少し。私は窓の外を眺めていた、どういふわけか、言葉は出てこない。他人を前にして言葉が出てくるといふ、誰もが当たり前でできるはずのことについての違和感、まだ根強いのかもしれない。ついこの間まで当たり前だったことが、今は違和感を何重にもまとって着ぶくれしている。この前彼に会って、それが一枚、はらりととはがれたやうな気がしていたけど、やはり違和感はそのままで。でもたぶん、喋ろう喋ろうとあせる必要はない、この違和感も、これは

これで、自然なことなんじゃないかというふうに思えてくる。例えば、動物は喋りはしない、これは人間だけの所業、ということは、みんなが当たり前言葉を使っていることを、むしろ奇妙なこととしておいても良いはず。

新幹線の中で予約しておいた旅館に着く。室内写真が小さく判断に迷うところだったので、サイトの口コミ欄を流し読みしてハズレがなさそうな所を選んでおいた。実際、悪くはなかった、ただ、こういう決め方って、結果が自分の予想を超えないという寂しさがあるけれども。情報が有効利用できるほど、世界は収縮していく、予定調和が増えていく。世の中を楽しめるのは、創造的な人間か無知な人間くらいになるのかもしれない。庭のアジサイが、キラキラしている。ややこしいことを考えるのはよそう。

そして金閣寺。写真や映像で何度も見たことがあるので、特に感慨深さはない。みんなが写真を撮っている、こういうものほど、多くの人にとって撮っておかなければならない被写体になる。今まで日常の外にあった世界が、今は自分の世界の一部であるという感覚が欲しいんだろうか、ただ、そうだとするなら、私がこんな風に、みんなの行為に説明をつけてしまおうとすることは、彼らのやっていることと、いったいどれほどの差があるというのだろうか。説明をつけるということは、ある意味では所有するということのバリエーションにすぎないんじゃないか。どちらも、子供じみていて、自由じゃない。……また、変なことを考えている、よせばいいのに。

他の見物客のことを忘れて、金閣を眺める。こういうとき、自分をつくづく皮肉っぽいな、と思う。きらびやかなものを見ると、いつも、それを求める誰かは、実際には寂しいんだろうなと感じてしまう。

考えては止め、止めては考える、そして、結局、自分が考え始めた位置から全く前に進んでいないことに気づく。

*

書き終えてみて、僕は、結局これは失敗だなと思う。はじめから分かっていたことだが、この日記は、「彼女」の口を借りて、実際には僕が僕の考えを垂れ流しているにすぎない。それらしく書いてみようとはがんばったものの、これは「彼女」ではない。じゃあどいうのが「彼女」らしいのかというと、それは「彼女」が書いたもの以外にない。いったい、この文字の羅列は何なんだ、と僕は思う。これは僕自身の日記として書かれたものではないが、しかし「彼女」によって書かれたものでもない。目の前の、奇妙な、誰のものでもない、収まりどころなく宙に浮いている文章を眺め、居心地悪さに頭をぼりぼりとかいた僕は、無言でノートパソコンを閉じる。旅館のゆっくりと流れる空気を、一瞬かきみだすように、ぱたん、という音が響いた、が、すぐに吸い込まれて消える。

「書けた？」

ちょうどシャワーから出てきた「彼女」が、濡れた髪を柔らかく白いタオルでふきながら、僕

の背中に向かって声をかけてきた。

「書けたけど、失敗だ」

「失敗？」

「そう、君の考えを想像しながら書いてみたけど、結局これは僕自身の考えたことでしかない。つまり、これは僕の日記でしかないんだ」

「そんなこと初めっから折り込み済みでしょ？ 私は、それでも書いて欲しいって言ったんだけど」

何を今さら、という感じで「彼女」は肩をすくめる。

「でも……」

「そもそも、成功も失敗もないんだから。書いてくれれば、私はそれでいいの」

「なんか、ちゃんと仕事してないみたいな気分なんだよ」

「ちょっとマジメすぎじゃない？ さすが元公務員ね。私がそれにお金払うって言うんだから、もらっとけばいいんだって」からかうような言い方をして、「彼女」は僕の背中を軽く叩く。「彼女」が近づくと、洗いたての髪からとても良い匂いがして、頭が一瞬ぼうっとなる。「まあ、がんばってよ。それはあなたにしかできない仕事なんだから。当然、その分対価も高くなるの」

複雑な顔をしている僕のためらいなど意にも介さない様子で、「彼女」はドライヤーで髪を乾かして浴室へ戻る。こんな日記に何の意味があるのか、僕には全く確信が持てずにいるが、僕よりはるかに頭の良い「彼女」には何か考えがあるのかもしれない。とりあえず僕はあきらめ、明日も書くしかないんだな、と一つため息をついて、愛犬の頭をなでるかのように、ノートパソコンのフタにそっと手を置いた。

*

「飲みに行かない？」

三日目の夜、「彼女」がそう言い出した。この三日間、東山、祇園、嵐山と、とりあえず誰もが思いつく京都の観光地で、旅館の近辺にある所は回ってしまい、明日くらいからやや間延びした旅になるんじゃないかと思っていた矢先なので、ちょっと変化をつけるには良いタイミングの提案だった。

顔見知りになった旅館のスタッフに、それとなくオススメのバーを聞いてみる、そして僕は「彼女」と連れ立って、夜の京都へと出て行った、朝からかすかに雨のぱらつく天気だったので、やや空気は湿っぽいけど、特別不快というわけではない、むしろ、昼の暑さを忘れられるくらいには心地良い風が吹いていて、僕は深呼吸などしてしまう。人通りの多くはない路地を進み、聞いたとおりの場所にあったビルの狭いエレベーターで上の階へとあがる、木製の格子の戸を開けると、確かに素晴らしく雰囲気の良いバーがあった。大きな木製の、複雑な輪郭をしたテーブル

が印象的な店内には、やや大きめの音量でジャズが流れている、地元の間らしい客が数人、カウンターで静かに飲んでた。ただ、「彼女」は他人の話し声のする場所をできるだけ避けたがるので、僕はさらに店の奥に進んだところにあったバルコニーの席につくことにした。

「涼しい」

背の低いビルの並ぶ京都の路地の風景を眺めながら、「彼女」は目を細めて呟く。「彼女」はリラックスしているようだった、反面、僕はあまり落ち着かなくて、ビールを何度も口に運んで少しだけ飲んで、グラスを置く。

「何そわそわしてるの？」

冷静な態度で「彼女」が聞く。

「何か落ち着かないんだよ、旅行先のバーって」

「そうなの」

「すごく自分が場違いな感じがしてくるんだ、こういうのって。君は平気なの？」

「私は別に。どこにしようと、常に場違いな人間だし」

「君らしい答えだな」

「真面目に答えると、慣れっこだから。働いてたときはいろいろ出張して、地元の店に一人で入ったりするなんてしょっちゅうだったし」

「しょっちゅうか。やっぱり忙しい仕事だったわけだ。充実感があったの？」

「何その質問」

「いや、それとなく君が言葉を失った原因を探してみようかなと思って。仕事に人生を捧げようとして燃え尽きたとか、そういうことをふと思ってみたんだけど」

やや僕の質問をうっとうしく思ったような様子で、「彼女」は肩をすくめ、グラスからアマレットジンジャーを一口飲んだ。

「充実感とか、そういうことは考えてなかった。とにかく目の前の仕事片付けて、そんでお金もらおうっていう、シンプルでドライな感じ。だって、充実感とかやりがいとか、考えるとだめでしょ。そういう人間から潰れていくのが世の常だと思う。私は特に、燃え尽きるとかそういう性質じゃない。それに、そもそも、言葉をなくした原因探しなんて、しようとも考えてないの、なんとなくだけど、もっとあいまいで、だけど決定的なものって感じがしてる。特定の犯人探しで解決するものでもないってことね」

「人の心は複雑ってことかい」

「複雑っていうより、いいかげんで気まぐれなんじゃない？ だから複雑にも単純にも見える。私は別に悩んでないの。悩んじゃダメよ、悩みなんて類型化されてしまってるんだから。悩んだ瞬間、人は自分の悩みを悩むことができなくなる」

「僕が日記を書くっていうのは、僕が君の代わりに悩むということなんじゃないかっていうふうにも思える」

「なるほど。自分で悩むよりは、他人に悩んでもらうほうがマシっていうのは確かだけど」

「僕の仕事の正体が、ちょっとつかめた気がする」

「安易に結論をだしちゃだめよ、手近な結論に逃げると、あなたの書くものはきっとつまらなくなる」

「オーケー。もうちょっとがんばってみるよ」

そう言って、僕は思い出したようにビールを飲む。「彼女」と話していたおかげで落ち着かない気分は収まり、自然なペースで飲めるようになっていた。

「それじゃあ、もう少し君についてを知ることから始めようか。もっとあいまいに、だけど決定的に」

「それはそれは、お手柔らかに。そうしてもらおうほうが良いわね、私を一人の人間というより、一つの病理として見るのは、得策じゃない」

「彼女」はカクテルを飲み干してグラスを置き、身構えるようにイスに座り直す。いざこういう感じになると、何を聞いて良いのか、ぱっと質問が出ないものだなと思い、僕はおどけたように視線を泳がす。ちょうど、バーテンがグラスを下げに来たので、「彼女」はモヒートを注文した。無愛想なバーテンは、いったんカウンターに引っ込んだ後すぐにバルコニーに現れ、アイフォンを懐中電灯代わりにして何やら隅にあるプランターを照らしていたかと思うと、そこに生えていた草のようなものをちぎって持っていく。何をやっているんだろうと思いながら、僕と「彼女」が無言のまま顔を見合わせていると、そのバーテンが戻ってきて、「彼女」の前にミントの入ったモヒートを差し出した。「ああ、そういうこと」とつぶやき、「彼女」はくすりと笑う。

「これ以上ないくらい新鮮なモヒートってわけね」

グラスを目線の高さに上げて、「彼女」はプランターから摘んだばかりのミントをしげしげと観察する。

「あの旅館のスタッフに感謝しないとね、確かに良いバーだよ、ここは」

僕はビールを飲み干すと、立ち去ろうとしていたバーテンを呼び止め、キューバリバーを注文した。

「……さて」

注文したカクテルが出てくるのを待ってから、僕はしきりなおすように切り出した。

「さて？」

「君について、何を聞こうか」

「聞きたいことを何でもどうぞ。こっちも答えたくないことには、基本、答えないから。遠慮無く聞いて」

「それじゃあ……、その仕事を選んだ理由って何だったの？」

「そんな質問？」

「彼女」は露骨にあきれた顔をする。

「いや、徐々に掘り下げようかと思って」

そんな言い訳をするが、僕はつくづく相手のパーソナルな領域の深いところに踏み込むのが苦手だなと反省してしまう。他人に踏み込まれることも好まないのだが、そのせいで、他人に踏み

込むこともできない。つまり、僕は結局こういうことについて、十代の少年みたいにナイーブなのだ、つくづく、恥ずかしくなるくらいに。

「何となく、そういうものだったから」

ため息でもつくような言い方で、「彼女」が答える。

「何となく、そういうもの？」

「そう。有名な大学卒業してそれなりに能力が高くて、保守的な社会を好まない人間なら、だいたいそういうとことに行きたがるっていうのが、お決まりのコースだったってこと。お金もステータスも得られるし」

「深い理由はなかったの？」

「はっきり言って、なかった。その時は、自分なりにちゃんと考えてるつもりだったけど、今にして思えば、何も考えてないのと一緒ね。だからこそ、すんなりそういう所に就職できたんだろうけど。就活って、悪趣味でしょ？ みんなが物語を切り売りしてる。自分が今までこんなふうに生きてきて、これからはこういうことをしたくて、だからこの会社に就職したいっていう物語をこしらえて、そんで、会社の側にも用意してる物語があって、それと合致した人間を採用していく。あれを見ると、結局、誰もが世の中に共有された息苦しい物語に支配されて、その中で生きて、死んでいくんだってことを思い知らされる。自由な時代だとか言われてるのに、みんな、わざわざ不自由の中に自分を閉じ込めることに一生懸命にならざるを得ない。大学生のときは、そんなこと全く気づかなかったけど、ゾッとする話ね、ホントは」

「そこへいくと、僕は公務員っていう、とことん舗装された道を選んだわけだけど」

「でも辞めた。その職業にしては異例の選択で、他の人たちからは大きく外れた方向へ舵をきったわけね」

「それはまあ、単にそこから降りてしまったというだけさ。そのまま続けてても、何もない人生しか待っていきそうになかったから。これからどうするかが全く見えてないし。君が仕事をくれなかったら、僕は結局そのまま飢え死にしてたかもしれない」

「それはどうも。降りたという点では私も変わらないけど。がむしゃらに働いて、たくさんお金もらえても、守られるのは見栄とかプライドくらいで、結局この先何もないっていう考えに陥って。まあ、それはさておいて、とりあえず、あなたを窮乏から救えたのは何よりね」

「ホントに瀬戸際だったからね」

「はたから見ると、カッコ悪い死に方ね。大見栄きって仕事辞めて、恋人にふられて、そんで飢え死にするって」

「ある意味潔いだろ、そういう所も評価してくれよ」

「そうね、草食とかいってバカにされてる若い男子にしては、気骨を見せたといったところかしら」

「……バカにしてるだろ」

「そんなことないって」と言いながら、「彼女」が笑う。ほろ酔い加減で、顔がほんのり赤い。

「ねえ」

ほおづえをつきながら、僕をのぞき込み、「彼女」が聞いてくる。

「何だよ」

「あなたをふった、恋人についてだけど」

「そんな質問するのかよ」

僕は、さっき「彼女」に言われたことを、わざとオウム返しするような言い方をする。

「だって、面白いじゃない、あなたみたいに変わった人が、どんな女性を好きになったのかって」

「僕は性愛についてはおおいに凡人だけど」

「名前は？」

「ユミ」

「美人だった？」

「とても」

「性格は？」

「すごく良い子だったよ。優しいし、怒ったりしないし、僕を困らせるようなことも言わない。ホントに、僕にはもったいないくらいだった」

「好きな食べ物は？」

「カルボナーラ。しょっちゅう自分でも作ってた。生クリーム多めで、ベーコンは入れないんだ」

「一番高いプレゼントは？」

「ユミが好きだったブランドのジャケット。確か、五万円くらいした。前から欲しいとかぼろっと呟いてたヤツを、こっそり買っておいて、誕生日に」

「セックスは？」

「ごく普通だった。そもそも、ユミはあまり好きじゃなかったね。月に三回くらいしかしてなかった。僕はもっと多くてもよかったけど、ユミはあんまり楽しそうにセックスをしてる感じじゃなかった。そして、僕もそんなユミを見て、相手の体から快楽を強奪しているような罪悪感をかすかに覚えてしまうのさ」

「嫌いなところは？」

「はっきり言って、無かったね。僕にしてみればできすぎた恋人で、唯一それが難点だったくらいさ」

「未練は？」

「別に……いや、あるのかな」

「おおいに引きずってる感じね」

「そんなことは……」

僕は上手く答えられない。別れることが予感できたそのときから、僕は変に思い入れを持ったりしないように、感情を切り離して客観的に事態をとらえ、「別れよう」というユミの言葉を、出来るかぎり素直に受け入れた。後腐れないようにしたつもりだったのだが、それが逆に良くなかったのだろうか、今だにときどきユミのことを思い出してしまうのは否めない。始めて会っ

たときはどうだったとか、二人で行った旅行だとか、やはり頭に浮かんできたりする。そんな僕の様子を見て、見透かしたような顔で、「彼女」は手に持ったグラスをふらふらと揺らしている。

「凶星ね」

「彼女」がちょっとだけ意地の悪い笑い方をした。

「僕の何が分かるっていうんだ」

酔っ払っていたせいもあるのだろう、余裕ぶった態度で僕の傷口を掘り下げる「彼女」に、何となく腹が立ってくる。おまけに、別れて以来始めて他人にユミのことを話したせいで、押さえていたものが外れてあふれるように、頭の中で思い出が鮮明によみがえってしまって、それが余計に僕の感情をかきみだす。

「分り易すぎるのよ。態度や言葉にはっきり出てる」

「うるさい」

「よりを戻したい？」

「いいかげんにしろ」

一回腹が立つと、どうにも歯止めがきかなくなってくる、僕も僕だが、「彼女」も「彼女」で、こっちが腹を立ててはねつけるほどに、負けじと傷口に塗り込む塩を追加してくる。たぶん、いきなり旅行に出て数日間を過ごしたせいで、お互いにぶつかりやすい状態になっていたのかもしれない、誰かと旅行に行く気付かない間に大きなストレスをためてしまうものだが、僕らのように知り合ったばかりの相手同士だとなおさらだ。あちこち忙しく出かけていたせいで今まで表面化していなかったものが、急にぽんと弾けてしまう。

「何怒ってんの？」

「別に怒ってない」

「怒ってる、というより、いじけてるのね。何をくよくよしてるの？ もともと自分がまいた種じゃない、自分の意志で仕事辞めて、それでふられたワケでしょ、それで未練残してるなんて、バカみたい」

「うるさい、黙れよ」

僕はカクテルをぐいっとあおって、わざと乱暴に大きな音をさせてグラスをテーブルに置く。

「ちょっと、そんなに怒らなくても」

「どれくらい怒るかは、こっちの自由だ」

我ながらどうしたんだと思うくらいに、僕は子供みたいにふてくされ、両手で耳をふさいでそっぽを向いてしまう。

「アホくさ」

大きなため息をついて、「彼女」が立ち上がる、そして、五千円札をテーブルに叩きつけると、「先に部屋に戻ってるから」と言い残して、スタスタとバーを出て行ってしまった。

「くっそ」

一人残された僕は、「彼女」ではなくてむしろ自分自身の体たらくに毒づきながら、グラスを空けた。何というか、僕は失敗から学べない性質だった、ユミの前に付き合っていた恋人のときもそうだったが、別れる前に、相手が自分にとってどれくらい大事な存在なのかとか、そういうことを全く考えようとししないのだ、ただ何となく一緒にいるだけで、だらだらと過ごしてしまう。さらに救いが無いのは、別れるときに強がってしまうのかなんなのか、僕は全く悟ったような態度で、すんなり別れを受け入れてしまうのだ。僕は変に冷静でいようとカッコをつけてしまい、たぶんホントは心のどこかで行かないでくれ別れたくないとか叫びたいくせに、「別れたければ、どうぞ勝手に」という態度をとってしまう。別れた後も表に出さずに、でも実はこっそり引きずっていて、こんなときに無様にも感情をかき乱されてしまうのだ。ああ、ダサい、僕はつくづくイタイ男だ。

ふと気づくと、グラスを下げにきたバーテンが横に立っていた、僕は勘定を頼み、「彼女」が残した五千円を手渡す。一瞬、目が合う、バーテンの目が「追いかけていいんですか」とうたえているような気がしたが、他人に全く干渉しないのが主義といった感じのバーテンはもちろん何も言わず、黙って店に戻り、釣り銭が乗ったトレイを持ってきた。

*

部屋に戻ったとき、「彼女」はいなかった。トイレかシャワーかと思ったが、物音はしていない。まあ、僕が帰ったのは彼女が出たすぐ後だったし、「彼女」がコンビニにでも寄り道していたら僕のほうが先に部屋に戻るのも当然だと考えながら、窓際のイスにもたれて天井をあおぐ。いったい、「彼女」はどういうつもりなんだろうか。言葉を使えなくなったとって僕に日記を書かせ、かといって深刻に悩んでいる様子でもない、あるいは深刻さを避けているのだろうか、飄々とし、かつ、憂鬱としている。そもそも、僕に日記を書かせることで問題が解決すると、「彼女」が本心から考えているフシもないのだ。僕自身が他人のことをあれこれ質問したり気にかけてりするのが苦手ということもあるが、「彼女」は「彼女」で、自分のことを語りたがっていないような気もする。もしかしたら、他に何か目的があるのだろうか、あるいは、目的など何もないのだろうか。

「彼女」は何も、話すことができない。

そう思うと、僕は何となく心配になってくる。何も話せない状態で、夜の街へ出て、何かトラブルに巻き込まれたら、いったい「彼女」はどうやって対処するのだろうか？ ここで待つべきか、いや、捜しにいくべきだろう。僕は立ち上がる、そもそも、「彼女」が出ていったのは僕の忍耐の足りないせいなのだ、その事実を認めるくらいの冷静さを、僕はすでに取り戻していた。

はてさて、どこへ行ったのやら、僕は再び夜の街へ、土地勘のない場所を、勘だけを頼りに進む、右か左か、たぶん右、いや左か、など、右往も左往もしつつ、歩きまわる。こんな時間に開いているのはコンビニくらいなので、見つけるたびに立ち寄るが、「彼女」の姿はどこにも

ない。治安の悪い場所というワケでもないのに、妙な事件に巻き込まれたりということもなさそうだが、なにぶん女性の一人歩きゆえ、クセの悪い酔っぱらいなどにかからまれていなければ良いのだけれど。言葉が喋れないということで、余計なトラブルを引き起こしそうな気もする。

あんまり闇雲に突き進むと、旅館に戻れなくなりそうなので、僕は大体の方向だけは見失わないようにしながら歩いていた、こういうとき、京都は道が碁盤の目状になっているので助かる。

三十分ほど歩いて、もう「彼女」は旅館に帰ってるんじゃないだろうかなどと思い始めたとき、僕は「彼女」を見つけた。公園、と呼ぶにはやや躊躇する、申し訳程度の植え込みと小さなブランコだけが置かれた空間の中に、「彼女」はいた。ブランコに座っているのだが、どう見ても小さな子供用なので、ほとんど体育座りでもしているような格好で、真っ暗な中に真っ黒い服に身を包んだ「彼女」がぽつねんとしている。遠目には一人落ち込んでいるような格好だったのだが、近づいてみると、どうもそういうわけではなく、「彼女」は目の前にいた真っ黒い猫に、にゃーにゃーと話しかけていた。近づいて話しかけようかと思うが、いや、そっとしておいた方がいいだろうか、と考え立ち止まる。どっちにすべきか決めかねて、僕はそのまま動かなくなってしまう。急に、お互いの孤独がそこにむき出しになってしまっているような気がしたのだ。僕は孤独で、「彼女」は途方もなく孤独で、数日間一緒にいたけど、それが互いの孤独に何か作用したというわけでもなくて、どちらも、その孤独を受け入れるでも埋め合うでもなく、持て余していた、その姿が、なんだかはっきりと浮かび上がってしまっているような気がしたのだ。何もかもがバカバカしくて、煩わしくて、「自由になりたいんだ」とキザぶって、人生を投げ捨てた僕と、急に言葉を失って、冷めた目でしか世の中を見れず、世の中から遊離してしまった「彼女」。たぶん傍から見ればバカみたいな二人なのだろうが、僕も「彼女」も他人とはどうも共有しにくい問題を抱えて、立ち往生している。ただ、そういう境遇であるせいで、少なくとも僕には「彼女」の孤独が見えている、けれど、そこから先へ、僕は進もうとしない、僕はこの距離について、他人よりはるかに敏感だという自覚がある、僕は多分、周囲の人々からは、あえて他人に無関心で鈍感な人間のように思われているけれど、本当は逆なのだ。他人とのその距離は僕の感受性のせいでもあれば、ナイーブさのせいでもある、ただ、この距離は、世の人がさほど簡単に批判したり無視できるものだとも思えない、これを無視すれば、人は他人の存在というものを、本当に感じることはできないはずなのだ。それについての感受性がないと、例えば、実は他人というものにどこまでも鈍感だからこそ社会的になれるというタイプ人間が出来上がったりする。

そんなことを思いながら、僕は黒猫と話す「彼女」を見ていた。黒猫は自分に話しかけてくるおかしい人間を警戒している様子だったが、やがてそっぽを向いてひゅっと身を翻して飛び跳ね、夜の中へと潜り込んで消えていく。その背中に「彼女」が、にゃーという叫びをぶつける。どこかへいなくなった黒猫をあきらめたように首を振った「彼女」が、とうとう僕の存在に気づいて、こちらへと顔を向けた。

ただ、この距離にいつまでも甘んじているわけにも行かないだろう、と僕は思う、この日和見は、確かに鈍感さと変わらないのだ。僕はずっと、ユミと別れた原因を失業のせいにしていたけれど、実は僕のこういう表面上の鈍感さや無関心さもまた、ユミの心をつなぎとめることがで

きなかった原因なのだ、たぶん。冷感症を装う「彼女」も「彼女」で、僕と似たような敏感さと、その裏返しとしての鈍感さを持っているのかもしれない。

「猫とは喋れるんだね」

「彼女」と目が合った僕は、できるだけ柔和な笑みを作りながら声をかける。

「にゃー」

威嚇する猫のような感じで、「彼女」が鳴きマネをしてみせる。

「さっきは悪かったよ」

「ずいぶん素直じゃない」

「心配してたんだ」

「何で？」

「……いや、だって、君は他の人と喋れないだろ」

「大丈夫よ、私には猫がいるから」

そう言って、「彼女」が笑う。

「何してたの？」

「別に、何も」

「何も無いのに、こんな所に？」

「そうよ。一人で旅館にいるの、何だか嫌だったし」

「寂しかったってことだね」

「違うって」

大げさに、「彼女」が首を横に振る、ただ、そのしぐさにはいくらかの照れがあった。「彼女」の横、空いているブランコに僕も腰掛ける。そのまま、かるくブランコを揺らしていると、まるで、すでにしばらくここで過ごしていたかのような、打ち解けて、落ち着いた気分になる。

「ねえ」

「何？」

「小さいころって、どんな子供だったの？」

「急に何よ」

「気になったから。だって、君の子供のときなんか想像つかないだろ」

「そうかな」

「そうだよ。ずっとクールな態度とってる。さすがに子供の頃からそんな感じだったわけじゃないだろうし」

少し、考えているような顔で、「彼女」が座っているブランコを前後に揺らす。大人の体重で、ブランコの鎖からギイギイと音が漏れた。

「たぶん意外だろうけど、すごく元気がよかった、周りからうるさがられるくらいにね」

「え、そうなの？」

「四六時中ぎゃーぎゃー言ってた気がする、自分の中にあるエネルギーをまき散らす性分だってみたいね。大人たちからよく怒られたわ」

「いつのまにそうじゃなくなったんだろう」

「たぶん、中学生くらいじゃない？ ありがちかもしれないけど、多感な時期に正反対の人格に変わって、それで、とうとう言葉一つ発しない人間になっちゃった」

「奇遇だな、実は僕も似たようなタイプだよ。子供のころはとにかく騒がしくて、授業中も止まらない、先生からはうるさいだの馬鹿だの怒られて、授業参観にきた母親からは恥ずかしくて死にそうなの、もういい加減にしてくれだの、ため息まじりに嘆かれたくらいさ。それで、中学生くらいになると、こんどは全く他人から距離を置く内向的な人間になってしまった」

「意外と似たもの同士なところもあったのね、私たち」

「きっと敏感なんだ、この世に他人がいるということの不可解さに。そのくらいの歳になると、急に、そういうことに気づいて、それが恐ろしくなってしまう。今まで自分の世界だけでやってきたのに、それが反転したかのように、他人に怯え始める。もちろん大人になればいくらかは慣れてしまうけど、僕らみたいな敏感すぎるタイプは、消化不良のまま、そういう問題を引きずってしまうんだ」

「どうかしら、私はむしろ自分自身のほうを持て余してる」

「だけどその二つには、いったいどの程度の差があるんだろう」

「さあ、単なる視点の違いっていうだけかもしれない」

そこでいったん会話が途切れる、僕と「彼女」は、同じようにブランコを揺らしながら、ほとんど人通りのない通りを眺めている。

「そういえば、君からの謝罪を聞いてない」

「は？」

「いや、さっきのケンカのことさ、確かに怒りだしたのは僕だけど、そもそもの原因は、君が僕を小馬鹿にしたような態度で、僕の元カノへの未練をほじくり返したせいでもあるだろ」

「自分が謝ったから、私もってことね」

「そうさ。仲直りにはそれが不可欠だ」

「……やだ」

「なんでだよ」

「だって、確かにちょっと意地悪だったかもしれないけど、謝るほどヒドイことしたかっていうと、ねえ？」

そう言って「彼女」一流の余裕ぶったしぐさで肩をすくめる。やれやれ、つくづくイヤな女だ、と僕は思う。

「よし。じゃあ、ひとつ賭けをしようか」

「賭け？ 私が負けたら謝れってこと？」

「その通り」

「別にいいけど。ずいぶんこだわるじゃん」

半分笑いそうな顔で、「彼女」が僕を見た。

「こうなったら意地だ」

「それで？ どうするの」

「次に僕らの目の前を通るのが、男か女かを当てよう」

「もう夜遅いし、男に賭けるほうが有利じゃない？ それに二人以上の人を通る可能性もあるわけだし」

「その時は男が多いか女が多いかで決めたらいい、でも例えばカップルだったら引き分け、延長戦だ」

「いちおう乗ってあげるけど、どっちに賭ける？ やっぱり男？」

「それは君にゆずるよ。謝りたくないようだし、僕は多少寛大な人間だからね」

「謝れって言うてる時点で、すでに器は小さいけど」

「うるさい」

「じゃあ私が男で、あなたが女、それでいい？」

「のぞむところだ」

こうして僕と「彼女」は馬鹿馬鹿しい賭けを始め、やはりブランコを揺らしながら、通りに現れる人を待ち構える。静かで心地良い夜だった、適度な湿気を帯びた空気は羽毛のように柔らかく、風は緩やかに解ける糸のように広がって、頬をなで、植え込みの葉を軽く揺すった。しばらく待っていたものの、時間帯と場所のせいか、なかなか人は現れない。

「このまま誰も来なかったりして」

「さっきまで何人か通ってたのにな」

「このまま続ける？ もし延長戦なんてことやってたら、しばらく帰れないかも」

「じゃあいいよ、賭けの方法を変えよう、今から十五分以内に、誰かが通るかどうかで勝負だ」

「そのほうが良さそうね、じゃあ、私、誰も来ないほうに賭ける」

「いいだろう。僕は来るほうだ」

僕は携帯電話を取り出して膝の上に置き、「一時十二分」、と声に出して時間を確認する。僕と「彼女」は無言のまま通りを見つめ、僕は何度か携帯電話を操作して時間を確認する、五分、十分と時間がすぎても、通りには誰も現れない。

「もう一時二五分ね」

タイムアップが近くなると、「彼女」もスマホを取り出して時間を確認し、すでに勝ちを確信したかのような言い方をする。

「まだ分からない」

僕は携帯電話を握りしめ、じっと、必要以上に真剣な顔をしていた、開始から十四分が経過して、落ち着きなく携帯電話をカチャカチャ鳴らし、暗い通りに目を凝らす。誰も通らない、「彼女」も、勝負あったとばかりに伸びをして、立ち上がる準備を始めていた。

「どうやらダメみたいね」

「彼女」がそう呟いた瞬間、植え込みがガサガサと音を立てる。

「何だ？」

僕も「彼女」も驚いてのけぞり、じっと、音のしたほうを注視した。すると、真っ暗でよく見えないものの、植え込みの下から何かが出てくる。

「……猫？」

「彼女」にそう言われて、よく見てみると、確かに、さっきの黒猫がそこに立って、暗闇にそばたてるようにして耳をぴくぴくさせている。

「にゃー」

さっきと同じような声で「彼女」が黒猫に話しかけると、黒猫はぴたっと耳の動きを止めて、むき出しにした警戒心にくるまるように身を縮め、ささっと飛び跳ねて、再び通りへと姿を消した。

「……僕の勝ちだな」

その言葉を聞いて、「彼女」が笑い出す。今まで僕が見た中で、一番自然な笑顔だった。

「猫も通行人にカウントするの？」

「そうさ」

「必死ね」

「何とでも言え」

「彼女」はまだ笑っている、僕が勝ちにこだわる様子が、よっぽど面白いらしい。

「いいわ、謝ってあげる」

「上から目線だな」

「だって、人じゃなくて猫だったし、ちゃんとした勝ち負けがついたわけじゃない」

「負けず嫌いめ」

「またケンカするつもり？」

「たまには僕も意地を張るのさ」

しょうがないわね、とばかりにため息をついて、「彼女」が僕のほうに向き直る。別に怒ったりあきれている様子はなく、むしろ機嫌は良さそうだ。

「今回は素直になってあげるわ。……ごめんなさい」

ぺこりと頭を下げながら、「彼女」が上目遣いで僕の様子をうかがう。

「……ごめん」

とっさに、僕は謝ってしまう。

「何謝ってんの？」

「いや、何か君が頭をさげるのを見たら、こっちが完璧に悪いことしたような気になって」

「バカね。お人好しすぎ。人間たまには傲慢になってもいいのよ、いつもそうだと困るけど」

僕はやや自嘲気味になりながらうつむいて、頭を搔く。

そのまま旅館に帰ろうかと思っていたのだけれど、こんなやりとりのおかげで僕と「彼女」の間にはずいぶんとリラックスした空気が流れていて、そのままキイキイとブランコを揺らしながら、しばらくぼうっとしている。

「もうひとつ聞いてもいい？」

ふと、もう少し「彼女」のことを掘り下げてみようかと思い、僕は質問を切りだす。

「何でしょうか」

「これも、全く想像つかないんだけど」

質問を待ち構え、「彼女」がうなずく。

「君の家族って、どんな感じ？ 君は何だかすごく個人として生きてるって風だから、これも想像つかない」

途端、「彼女」が表情を曇らせる。それまでの温和な雰囲気や、ずっと浮かんでいた笑みはさっと消え、険しい顔だけが、そこには残った。

「……あ、喋りたくないことは、もちろん喋らなくて良いし……」

どうやら、最悪のことを聞いてしまったらしいと察知した僕は、その質問を取り下げようとするが、一度投げかけられてしまったそれは、「彼女」にグサッと突き刺さってしまい、ちょっとやそっとでは引っ込められそうにない。家族に関して、「彼女」には全く良い感情はなさそうだった。

「気にしなくていいわ」

そう答える「彼女」の、表情からはいくらか陰しさが引いていたが、やはり重々しいままだ。

「ひとつ聞くけど」

そのまま黙っているつもりかと思ったが、「彼女」のほうから話し始める。

「何？」

「この旅行の出発のとき、私、ホントに行き先決めてなかったと思う？」

「少なくとも、君はそんなふうには振る舞ってたけど」

「ホントは決めてたの、ここに来るって」

「じゃあ、なんで何も決めてないふりなんか」

「来たくないっていう気持ちも強かったから。来なきゃいけないような、来るべきじゃないような、両方が同じくらいの力でせめぎあってる感じだった」

「つまり、何か目的があって、ここへ来たってことか。それも、あまり楽しそうじゃないようなことがここにある」

「そうね」

「そして、それは君の家族と関係がある」

「そのとおり。私の唯一の肉親が、ここにいるの」

「唯一？」

「そうよ。躊躇したら、そのまま黙っててしまいそうだから、全部言ってしまうけど、私の母親が、ここに住んでる。父親は、そもそも誰なのか分からない。兄弟は、私の知る限りではない」

「父親が分からない？」

「そうよ。とんでもないアバズレなの、私の母親は。どうしようもなくだらしなくて、お金と寂しさを動機付けにして誰とでも寝る女だったのよ、それで私を身ごもったけど、肝心の父親が誰かわからない、行きずりの男の中の一人だったからね。結局墮ろしもせず私を産んでしまったけど、当然そんな人間に子供が育てられるわけもなく、見かねた児童相談所の人たちに、施設に入れられることになったってわけ」

「それは、つまり母親を憎んでるってことか」

「そうでもないよ。昔はそうだったかもしれないけど、今はそういう感情的な拘泥はなくなっ

てる。逆に干からびてしまったみたいに、もう何とも思わない。昔はいつも頭の片隅に母親のことがあったけど、今はときどき思い出すことくらいしかない」

僕はなんと言っただけでいいやよく分からない、深刻な問題について話しているようで、その実、「彼女」は感情のこもらないような声で、淡々と喋っている。

「……母親に会うつもり、なのかい？」

「結局、そういうことになるかな。とっくに干からびた感情だけど、どろどろしたものが蒸発した後に、何だか上手く処理できない固形物が残ってる感じ。子供の時以来もうずっと会ってないから、何年ぶりなのかよく分からないくらい。ずっと会いたくなくて、避け続けてきたけど、居場所だけは知ってるの」

僕は黙っている、通りにはやっぱり人はいなくて、夜だけがますます深くなる。

「何であなたが深刻な顔になるの？」

僕を見る「彼女」の表情には、幾らかの重々しさは残っているものの、幾らかの余裕もあって、何か母親のことについて思いつめているというほどの様子はない。話し始めたら楽になったのか、取り繕っているだけなのか、そのポーカーフェイスからは読み取れない。

「いや、いきなり結構な身の上話が出てきたから、上手く反応できない」

「別にそんなの求めてないし。こういう境遇を抱える人間の中には、周りに深刻な顔して欲しいから勿体付けて話す人と、そんなのいらないからあんまり話したがらない人がいるのよ。私はもちろん後者」

「そういうもんかね」

「そういうもん。同情されても何か居心地悪いただけだし、私はたまたまそういう境遇で、そうじゃない人もたくさんいて、ホントはそれだけの話、でしょ」

「まあ、言っただけで、ね」

「私ね、あなた以外の人とは喋れなくなったって言ったでしょ？」

「うん」

「前にも一度、似たような症状になったことがあって」

「へえ」

「それが、母親から離れて施設に入ったときなの」

「今回の症状は、そのことと何か関係があるってことなのか」

「それは分からないけど。母親に会ったからといって、私が喋れるようになるとは限らない、でも、やっぱり整理は付けておかなきゃいけないんだろうなって」

「まあ、一般に問題というのは、目を背ければ背けるほど、しつこくそこに居座るものだけだ」

「そうね。そこに原因を求めるつもりはないんだけど、やっぱり避けてるかぎり、離れられないのは確か。私の言葉が戻ろうと戻るまいと、とりあえず会うことにしたの」

「それで、僕も一緒に行くっていつのか」

「大丈夫。母親があなたにどうこう言う可能性はほとんどないと思うわ。もう、母親にはなにがなんだか分かりやしない。だから、今はあんなとこに住んでるんだし」

「あんなとこ？」

僕と「彼女」の目が合う、たっぴり間を開けて、ゆっくり動いた「彼女」の唇は、とても重そうだった。

「……精神病院」

*

六月、二十七日

観光客でいることにも疲れてきて、「彼」とバーに行ってみる。雰囲気はとてもよくて、カクテルも美味しい。

知らない土地で、こういう、観光客がいない所に行くと、本当に誰でもない人間に近づける気がする。観光客である間は、観光客というアイデンティティを与えられて、その衣に保護してもらうことができるけど、こういう所にいると、私と「彼」は、収まりどころの無い、ふわふわとした、不自然、な存在になる。その不自然さが、「彼」を落ち着かない気分にしたようだけど、私はこういうのが好きだったりする。私は、「誰か」でいたくないのかもしれない、たぶん昔からそうだった、「誰か」でない瞬間こそが、私にとっては自然体なのかもしれない。

「彼」と半ばケンカのようなことをするハメになる、というか、「彼」がへそをまげてしまったのだけれど。私が、元カノへの未練について突っつきまわして、ちょっとイジメてしまったのが原因だ。正直、「彼」が怒るのはよく分からない、もともと自分がまいた種なんだし、そこはあきらめも付けやすいはずだし。未練があるならヨリを戻すように努力すべきだし、それをしない優柔不断さは、何なんだろう。別にこれは「彼」の問題なんだし、私が考えるようなことじゃないけど。

仲直りした「彼」に、子供の頃、母親と離れて、言葉を失ったことを話した。「彼」は深刻そうに聞いていたし、私も深刻そうな顔をしていたかもしれない、けど、あれは本当に、不幸な出来事だったんだろうか。声を失ったとき、私は、この不自然さの中にいた。確かに、私はそれに恐怖して、とまどい、震えていた、けど、妙な安心感の中にいた、というのも、また事実だったのだ。その静寂、沈黙は、ある種の、ようやく見出された、私の故郷だった。

母親に会いに行く。

それで何か解決するのだろうか、何も変わらない、という気がしている。心の傷の回復、という物語を求めてはいない、そんな単純なヒロインを演じて、自分が何かを取り戻したという、そんな振る舞いをして、私は息苦しい隘路に収まりたくはない。だからこそ、あえて母親に会うようなことはしてこなかった。けど、今は逆に、それを避けていることは、結局それにこだわっているのと同じことになるんじゃないか、と考えるようになってきた。一度ニュートラルにならなきゃいけない、だったら、あれこれ考えずに会ってみるべきなんだろう。

かといって、母親に一人で会うことも考えられなかった、私は、今、誰とも喋れないのだ。母親と会ったら喋れるようになるんじゃないか、あるいはそういう可能性はあるかもしれない、けど、私には、全くそんな予感がない、私は物語じゃなくて、現実を生きているのだ。だから、「彼」に付いて来てもらうことにした。

私は不自然さの中にいる、その安心感の中にいる、それは、私にとって良いことなのだろうか、あるいは、反対に、言葉を取り戻すことは、私にとって良いことなのだろうか。私は、まるで言葉の荒野の上でひとりぼっち、置き去りにされて、白く燃える太陽と、刺々しい黄金の砂に焼かれているよう、納得のいく言葉は一つも持っていない、全てが借り物で、言葉を発した瞬間に、私は嘘つきになる、たった一滴の碧水のように、私の心の中から、たった一つの言葉を、私は取り出すことができるのだろうか、私が、本当に、発するに値する言葉を。

「彼」が日記を書いている、「彼」を通して、私が語る、あるいは、「私」を通して、彼が語る。「私」が私として書くということ、「彼」が私として書くということ、その二つには、いったいどれほどの差があるのだろうか。

私の言葉はいったいどこから来るのだろうか。私の母の子宮から？ 私の母の産道から？ 私の母の膣口から？ だとすれば、その言葉は、きっと血と羊水のような人間の業と醜さに、まみれていることだろう。

*

しばらく、というか、けっこう長い間、「彼女」は実際にそうすることを躊躇していた。母親に会いに行く、と宣言はしたものの、無理もないかな、もう子供の頃から、ずっと避け続けてきた相手なのだ。旅館でだらだらしたり、四条三条界隈をぶらぶらしたり、ちょっとした観光地へ出かけてみたりするが、肝心の母親のところに行く素振りはない。

母親が精神病院にいる事情は、「彼女」も聞いた話でしか知らないと言う、もともと精神的に不安定で、体を売ったり男に依存したりしながらギリギリのところで生きてきた母親は、徐々に心を病み始め、抗鬱剤を飲んで通院していたが、症状は悪化、さらに若年性アルツハイマーの気が出てきて、精神が荒廃し、とうとうある日、歓楽街の入り口に全裸で座り込み、意味不明のことを叫んでいたところを保護されて、結局入院してしまった、ということらしい。数年前、「彼女」がまだ喋れたころの話で、生活保護を受けていた母親の、担当ケースワーカーが、どういうルートでか「彼女」の連絡先を調べ、連絡してきたということだった。

「いい気味だ、ってその時はちょっと思った」

母親の惨状について、「彼女」はそう言った。

「やっぱり憎んでたんだね」

「憎んでたっていうのはやっぱり違うかな。別に、こっぴどく虐待されたとかじゃなくて、単に育児放棄に近い形で、あの人はまともに私を扱うことができなかつたっていうだけ、とことん

だらしのない人間だったの。そうじゃなくて、私はあの人が嫌いで、軽蔑してた。一番好きになれず、尊敬できない人が、たまたま一番近いところにいたっていう感じ」

「親だからこそ、じゃなくて、たまたまだった？」

「そう、たまたま。親と自分は全く別の人間で、そこに、世の中の人たちが信じてるような、無条件の絆や愛みたいなものはないっていうことを、私は人生のかなり早い段階で気づいてしまったから、反抗期の中学生みたいに、親を憎むことはしてなかったと思う」

「でも、いい気味だっていうのは、いくらかの憎しみが無いと出てこない感情だろ」

「どうかな。確かに、私は完全に母親と自分を切り離すことができてないのかもしれない」

「そうだよ、だって、もし完全に切り離せていたら、母親に会いに行こうなんて、思うはずがない」

「確かにそうね、でも、それが私自身の問題なのか、そういう絆を必然とみなす通念にそうさせられてるせいなのか、それは分からないけど」

「あるいは両方」

「単純な答えね、答えのようでいて、それは答えじゃない」

「じゃあ、質問を変えよう。これから母親に会いに行くのは、自分と母親を切り離すため？ それとも、何らかの絆を見出すため？」

僕にそう聞かれた「彼女」は、じっと黙っている。物事を上手く考えられなくなってしまったかのように、ぼんやりと、視線を宙に放って動かない。

「君が望んでいるのは、どっち？」

何時まで経っても喋ろうとしない「彼女」に、僕はさらに質問する。「彼女」はそれでもずっと考えている、あるいは、考えていない。

「……望んでいるとか、いないとか、そういう問題じゃない、と思う。私にできるのは、母親に会ってみて、何かが起ころうと、何も起きなかりょうと、その結果を受け入れるだけ」

「それなら、どうして君は決心を付けられないんだ」

この数日間、「彼女」は母親の所へ行こうとしないだけでなく、その話すらしなかった。このままではいけないと思った僕が、それとなく母親のことを切りだして、ようやく得たのが、その母親の境遇及び精神病院にいる事情についての情報だった。

「たぶん、怖い。母親に会うことそのものが、じゃないわよ？ そうじゃなくて、それが私にとってどうでもよくなった過去の出来事のように思っている、ホントは、私の意識の奥底で、それがとてつもなく大きな問題になっていることだったらどうしようって考えるの」

「深層心理、みたいな？」

「そうよ、意識の上では平気でも、実は、みたいなことだったら、私はどうなるんだろうって思うの」

「それは、自分でそう思うから、そういう深層心理の問題が作り出されてしまうんじゃないの」

「でも、それが作り出されてしまえば、それが私の現実になってしまう。だから、もう分からなくなるのよ、そう思っているせいでそうになっていることだろうが、思ってもなくても深層心理で

そうになっていることだろうが、そのことで、何かの結果が引き起こされてしまえば、どちらにしる、それが私の現実になる」

「難しい悩みだな」

「ちょっとでもそれを考え始めた時点で、すでに手遅れよ」

「でも、やめておくっていう選択肢は、ないんだろ？」

僕にそう言われると、「彼女」ため息をついて、窓の外を見る、いつの間にかアジサイは散って、にぎやかさは遠ざかり、庭の緑が、穏やかなささやきのように、部屋の中に届いていた。

「覚悟を決めなよ」

僕は「彼女」にせまる、これ以上引き伸ばすのは、たぶん、「彼女」にとってよくないことのような気がした。普段は他人の意思決定に干渉することを控える僕だったが、今までとは違う弱さや曖昧さや優柔不断さを見せている、らしくない「彼女」を、このままにさせるべきではないと思い、あえて決断を促す。

「……ついてきてくれる？」

「彼女」の目が、僕をのぞき込む。真っ黒い服とコントラストをなすヘーゼル色の瞳は、あいかわらず美しい。

「もちろん」

僕は、ちょっと大げさなくらいにうなずいてみせる。「彼女」はほほ笑み、ほとんど聞こえないくらいの声で、「ありがとう」、と呟いた。

七月に入った京都の街を、僕と「彼女」は抜けて行く、祇園祭の賑やかさに泡立ち始めた通りには、観光客と思しき、街の空気から浮き上がった人たちが、キョロキョロとして歩いていた。そういう人たちの、顔、声、息づかい、体温によるいきれ、肌を湿らす汗、そういうものが、僕にはハッキリと感じられている。なぜなら、僕と「彼女」は、その場にいる誰も彼もと、全く別種の人間になっていたからだ、そこにいるどんな人間とも、僕と「彼女」は共通項を持たない。僕も、おそらく「彼女」も、奇妙な高揚感と緊張感の中において、感覚は、あるいは感受性は、恐ろしいほどクリアだった。視覚も聴覚も嗅覚も触覚も、境界を保ちながら混ざり合って、僕は目で見ただけのものに触れ、耳で聞いたものを嗅いでいた。

「まるで、自殺しに行くみたい」

ぼつり、「彼女」がそんなことを呟く。母親に会いに行く、押入れの奥に仕舞い込んであった小箱を開けるかのように、もう何年も目を向ける事のなかった部分を、直視する、それは「彼女」の欠損でありながら、「彼女」の人格を構築する基盤のようなものになってしまっていた、だから、「彼女」にとって母親に会いに行くということは、「彼女」がいくら平気な顔をしていても、まるでその基盤を壊して人格を崩壊させ、自殺を凶ってしまうような気分させることなのだ。実際には、たいしたことはないのかもしれない、が、「彼女」はひたすら戸惑っている、予測がつかないのだ、予測がつかないことに対して、人は、どれほどの知性と豪胆さを備えていようと、戸惑い、恐れる以外にはない。

電車からバスに乗り継いで、僕と「彼女」は目的地を目指す、「彼女」は明らかに緊張して、何も喋ろうとしない。その「彼女」の、不思議な種類の緊張が僕にも伝わってしまう、景色の見え方も、何だか普段とは違って、視界の中心が奇妙に膨張して浮き上がっているようで、窓の外を流れるそれは、まるで波をうつように通りすぎていった。

「母親について、何も、いい思い出はないの？」

じっと考え込んでいる「彼女」を、そのままにしておくほうがいいんだろうかと思いつつも、僕は、そういう質問を試してみた。「彼女」は混乱している、だから、その考えを整理するために、何か喋っておくという手段もありなのではないかと考えたからだ。案の定、「彼女」はしばらく黙っている、僕の質問を不快に思っているという感じではないが、まるで聞こえていなかったかのように、宙を見つめ、唇を軽く噛んで、物思いに耽っている。

「特にないわ、かといって、悪い思い出も特にないわ。基本的に、あの人は無関心だったから、私にも、自分にも。寂しさと居心地の悪さが、抽象化されて漂っているような、そういう人格、それが私の母親だった」

「そっか」

ようやく喋った「彼女」に、僕は特につっこまないようにした、いったい、「彼女」にどこまで言葉にさせるべきなのか、それがよく分からない。

「ただ、一度だけ……」

促すでもなく、離れるわけでもなく、何とないニュートラルな状態でいた僕に、「彼女」の方から話し始める。

「もう小さい頃だし、はっきり覚えてもいないけど、一度だけ母親がケーキを買って帰ってきたことがあったような気がする。どこかで食べて、それが美味しかったから、あんたも食べなっていながら、私にそれを買ってきてくれたの」

「いいと思うよ、特別じゃなくて、ありふれた感じだけど、そういうのが、逆にすごくいいっていか」

「自分が食べておいしかったっていう喜びみたいなものを、だれかと共有したかったのね。孤独で、自分を持て余していた人だったけど、そういう人間味みたいなものは、失っていなかったのかもね」

「うん、そうだね」

「でも、その思い出が、本当の思い出なのかどうかっていう自信はないの。子供の頃の私が、やっぱり寂しさのせいで、無理に作り出した記憶かもしれない」

「そういうこともあるかもしれないけど、でも、やっぱり本当かもしれない」

「それを確認する術はないわ、当の母親も、すでに心がボロボロになってしまってるから。変な記憶なの、何歳の時かも分からない、母親がどこでそのケーキを食べたのかも買ったのかも分からない、どんなケーキだったのかも分からない、母親のそのひと言と、なぜか、そのケーキを食べようとする私が握りしめた、銀色のフォークだけが、妙に鮮明に浮かび上がるの、変な記憶、私の頭の中にあるのに、常に外から降ってくるような、そういう思い出しかたしかできない」

僕は、少し考えこむ、「彼女」のその記憶の正体に見当をつける、知識も何もなくて、思考は頭の中で空回りしていた。

「たぶん、本当の記憶だよ」

「何でそう思うの」

「さあ、何となく」

「そうであればいい、っていうことじゃないの」

「そうかもしれない」

「そのほうが良いのかしら」

「そうであって欲しくないの？」

「そうじゃなくて、その記憶が本当だろうと幻想だろうと、それが私にとって、どういう意味や価値があるんだろうっていか」

「.....純粹に、君はどう思うの？」

「どうって？」

「つまり、意味とか価値とかよりも、そうあって欲しいのか欲しくないのか、そうだったら嬉しいのか嬉しくないのか、そういうことさ」

ふっと我に還ったような顔で、「彼女」は僕を見つめてから、何だか気まずそうに視線を軽くそらし、僕の、あごのあたりにその視線を留めると、そのままじっと考えていた。

「分からないわ、やっぱり」

「自分の感情が？」

「うん.....でも、誰かが私のことを考えているっていうのは、やっぱり嬉しいことのような、

気がする」

僕は、戸惑っている様子の、ちょっとらしくない「彼女」の姿がどこかおかしくて、クスリと笑う。

「何笑ってんの？」

「いや、何だか、ようやく素直になってきたなと思って」

「からかわないでよ」

「お互い様だ」

すねたようなそぶりで、「彼女」は窓の外へそっぽを向ける。僕はそれがおかしくて笑っていた。僕も「彼女」もいくらかりラックスすることができて、少なくとも「彼女」の顔からは悲壮感のようなものは消えていた。「彼女」はこれから母親に会うことを恐れていたし、僕はその恐れを感じ取っていた。僕に何が出来るのかは知らないが、僕はできるだけのことをしてあげるつもりでいる。「彼女」はどうなってしまおうのだろうという思いと、「彼女」はやはり「彼女」のままで、何か憑物でも落ちたように、ケロリと言葉を話せるようになるのではないかという思いが、僕の頭の中で浮かんだり沈んだりしている。

バスは山道へ入り、景色は流れている。まだ、景色は波をうっていた、やってくる波の向こう、茂る木々のぐるぐると回る緑に、僕は酔いそうになる。「彼女」には、この景色がどう見えているのだろう、僕は、「彼女」と同じ景色が見たかった、それを知る術はなくても、今、僕は孤独になりたくなかったし、「彼女」を孤独にしたいはなかった。「彼女」は僕の方を見てはいない、じっと、窓の外、一枚の絵が繰り返される紙芝居のような、景色を見つめたままにいる。

*

山の上にひっそりと建っていた精神病院は、しかし、陰鬱だとか、不気味だとか、そういう雰囲気ではなく、こぎれいで清潔な印象すらあった。ただし、隔離された場所、という性質のせいなのか、中に入ると、妙なよそよそしさと、独特の緊張感に固まった静けさがあって、僕は身をこわばらせる、そこに立った瞬間、言いようのない孤独感が僕の体を突き刺して、いたたまれなくなった。これは、ここにいる患者たちの持っていた孤独なのだろうか、あるいは、社会が、そこに入る人間たちを隔離するために作り出した孤独なのだろうか。

僕は、「彼女」の代わりに面会の申し込みをする。「彼女」は言葉を失ってしまっていて喋ることができません、などと口走れば、ややもすればミイラ取りがミイラに、つまり「彼女」が入院させられてしまいそうなので、ポリープの手術をしたばかりで喋ってはいはいけないんだとか、適当にごまかして、僕があれこれと説明する。始めは異父兄妹ということにしようかとも思ったのだが、変に突っ込まれるとボロを出しそうなので、僕は「彼女」のフィアンセだという設定にしておいた。入院患者の、もう何年も縁のなかった娘が突然会いに来たことに初めは驚いていた

様子の担当医は、どうも彼本来の性格らしい無表情で淡々とした態度に戻り、僕の話聞き始める。

残念ながら、面会のごく近い親族に限られるという話だった、母親の精神状態はやや不安定で、あまり多くの人間に合わせることはできないということらしい。「彼女」は、一人で母親に会うことに恐れを抱いていた、だから僕は、そのことを切に訴え、どうにか一緒に面会をさせて欲しいということを申し入れる。担当医は、クセなのか眼鏡の縁に何度も手をやりながら首を横に振り、結局、許されたのは、オープンなスペースで「彼女」と母親を面会させ、僕は少し離れた、観葉植物の陰になる席に座って、その二人の様子をのぞいていても良いということだった。

面会の場所に通され、そこに、まず、「彼女」がぼつんと座られる。ウッド調の、カフェとオフィスの間のようなデザインのスペースは、人をリラックスさせる十分な雰囲気を用意していたものの、「彼女」は当然落ち着けるはずもなく、じっとしているのにそわそわとした感じが伝わってきた。僕は、「彼女」から離れた席に座られることになる、視界は観葉植物の鉢に遮られ、僕の姿は「彼女」の位置からはほとんど見えなくなっていた。

「浮かない表情だね、当然かもしれないけど」

その席につく前、すがるような、怯えた表情をしていた「彼女」に、僕は話しかけた。

「正直、帰りたいわ、やめておけば良かった」

「やめる、っていう選択肢は、ないって話だったろ？」

「そうだけど、実際に来てみると、想像以上に恐いんだから。そういう感覚、あなただって理解できるでしょ」

僕は、無言でうなづく、目の前の「彼女」は、普段の余裕めいた雰囲気を失って、うつむいたまま、白い指で、黒いスカートの布地を、つまんで、せわしなくいじくっている。しわの寄ったその布地の黒色は深く、ゆっくりと渦を巻いているようで、このまま、怯えた「彼女」がそこに吸い込まれて消えてしまいそうだった。

「まあ、僕もそばにいるし」

「頼りないけど。いないよりマシね」

「まだそういう悪態をつけるんなら、きっと大丈夫だろ」

「だといいいけど。私、どうなっちゃうんだろう」

「それは、会ってみないと何も分からない」

「彼女」はじっと考え込む、次の言葉は出てこない、そして、そのまま時間が来てしまい、僕は「彼女」に手を振って、「彼女」からは視界の遮られた席に座る。一瞬、「彼女」が、すがるような目をしていて、その目に、確信や決意のようなものはなくて、きっと、今の「彼女」には、逃げ出したいという気持ちしかないのだと、僕は思わざるを得なかった。

やがて、準備は整い、「彼女」の目の前に母親が現れる。白髪混じりの、バサバサとした長髪を垂らした中年の女性が、焦点の合っていない目をして、病院のスタッフに誘導されながら、「彼女」に近づいてくる。その女性、つまり「彼女」の母親は、まるで酔っ払っているかのように

、ゆら、ゆら、とゆっくりとした動きで左右に体を揺らしている。その姿は、海中で漂うウミユリのような。たぶん、まだ五十代くらいなのだろうが、かすかに見えるその横顔には、年不相応な深いシワがたくさん刻まれ、まるで、特殊メイクで顔を覆って作られた老女のように見える。

観葉植物の葉の間から、僕に見えているのは、「彼女」の表情だけ、戸惑い、微かに唇を震わせ、今にも逃げ出しそうに、怯えている。会うことで、何か変化が起きるのだろうかと思っていたが、今の「彼女」は、母親に会う前の不安や怯えを、そのまま極度に強めただけのような感じで、じっと、その場に座って耐えているだけだった。

二人が座るイスの間に置かれたテーブル、その上に、筆談用の紙と太めのマーカーが置かれている。鉛筆やボールペンのような、尖ったものは、患者が暴れだすと危険なので使えないらしい。もっとも、「彼女」は喋れないだけでなく、そもそも言葉が出てこないので、筆談すらできないのだ、あんなものを置いても、結局、「彼女」は母親と会話ができるわけじゃない。

「彼女」は、何も言わない、そして、母親も、何も言わない。じっと、身を固くして震えている「彼女」と、ただ呆けたようにゆらゆら揺れている母親、目の前にいるのが自分の娘だと、おそらく全く認識していない。その精神の荒廃は、想像以上のようなようだった。もはや、この社会に何の未練もなく、置いてこられるものは全て置いてきてしまい、あとは、その肉体が朽ちるのを待つだけとでもいうように、その母親には、意思や人格といったものが、まるで感じられない。僕はもちろん、この母親がどういう人だったのかは知らない、「彼女」の言うように、「彼女」を含めたいろんなことから逃げてきたのだとしたら、それは自分の思うがままに生きてきたというよりも、たぶん、何か恐れのようなものを抱いて、ずっと逃げまわり、とうとう追い詰められてしまい、超えてはいけな一線を超えて、何か別の領域へ飛び込んでしまったという感じだった。気ままに生きる強さなどは持たず、何も引き受けたり背負ったりすることができない弱さに追いたてられた人、とでも言えばいいのだろうか。ただ、僕の推測は、全て無責任な臆断でしかない。

向かい合う、「彼女」と母親、その光景は、ひどくおぞましいようであり、滑稽でもある。恥や怒りや恐怖といった感情を、無表情の仮面の下に抑えこみ、必死で葛藤する「彼女」だったが、一方の母親は、中身が空っぽな笑みをシワだらけの顔の下に浮かべて、「彼女」をコケにするかのように、視線も合わさず、ずっと、体を揺さぶって、やけに響く、ひゅうひゅうという呼吸音を、口と鼻から漏らし続けている。これは、いったい何なんだろう、と僕は思う。こんなのは、「彼女」にとって全く期待はずれの面会だった。「彼女」が期待していたのは、寂しさや欲におぼれて、どうしようもなさを抱えながら、しかしそういう所に、わずかであれ人間臭さを残した母親だっただろう。そうであれば、「彼女」は、自分の中に残った、どうにもできなかった思いを、ここでぶつけることもできたし、あるいは、それを見つめ直すこともできたはずだ。しかし、「彼女」の目の前には、そういうものに耐えもせず、全部、ゴミ箱にでも投げ捨てて、後はただの腑抜けとして、食事と排泄のみを繰り返す、生命と呼ばれるものを維持する、名付けようのない物体が、ごろんと転がっているだけだった。

「彼女」は、一生懸命何かを考えようとしていた、そして、何かを言おうとしていた、何でもいい、たったひと言だけでも、何かを言う必要があったのだ。きっと、僕には想像もつかないよ

うな複雑な感情のうねりと、「彼女」は格闘している、それなのに、目の前にいるのは、どんな言葉も、投げかけるに値しない、ただの木偶のような、母親の残骸でしかない。ひどい絶望感で、「彼女」は青ざめていた、それでも、まだ、何か言葉を発しようとしていたのだろうか、机の上のマーカーを拾い上げると、それを握りしめ、そして白い紙を見つめる。だけど、「彼女」は、それ以上動けない。「彼女」の、必死の葛藤と努力を受け止めるものが、そこにはないのだ、「彼女」の母親は、単なる空洞だった、屈辱と悲しみで揺れる「彼女」の瞳が見つめているのは、単なる虚空でしかない。マーカーを握りしめる手は、ずっと震えていた、「彼女」は唇を噛み締める、「彼女」は悟るしかなかった、もう、この相手には、ほんのわずかな期待すら、持つことを許されていないのだと。左右に揺れる母親の体の、律動に合わせて、水分のない、藁のような白髪が蠢いている、そのシワだらけの顔に空いた二つの目は、どんなおぞましい光を放って、「彼女」を呪縛しているのだろうか。

面会の時間が終わってしまう、「彼女」は、結局、ひと言も発することはできなかった。

*

七月、十日

いったい、あそこで何が起きたというのだろうか、いや、何も、起きなかった。私が母親だと思って会いに行ったものは、すでに母親ではなかった。ということは、私には、もう母親はいない。私の感情や思い出が、わずかに付着していたはずのそれは、すでに空になっている。私がタイムカプセルのように残してきたものは、すでに消え去ってしまっていた。

本当は、何てことはないはずなのだ、私がもうどうだっていいと思っていたものが、実際にどうだってよくなっていた、ただそれだけのこと。それなのに、そうだろうと思っていたものが実際にそうだったということが、なぜこれだけ、私にひどいダメージを与えたのだろうか。あるいは、私は、単にそうだろう、ではなくて、どうせそうだろう、というふうに考えることで我が身を守っていただけなのかもしれない。裏切られることが明白な期待を、私は手放すことができなかつたのか、だとしたら、私はとんだ大馬鹿だ。まるで子供のような期待の仕方をして、その折り合いをつけられていない。

私があそこで見たものは、何か、おぞましいものだった。でも、母親は空洞で、それ自身がおぞましいというよりも、そこに映しだされた、私自身の孤独、救われなさ、そういうものの、根深さ、底知れなさ。あるいは、私自身の空洞、何も無さが、母親のその空洞に、共鳴していた。

私は、立ち尽くしている、荒野に投げ出されたかのように、途方にくれて。言葉は戻って来なかった、もうそれは、私の所には無い、という絶望的な不安に襲われ、私はカラッポの貯金箱を振り回すようにして、言葉を探す。当然カラッポなので、何も出てきやしない、私は、解決策を見いだせず、思春期の子供達みたいに、永遠のような苦痛をともなう悩みを抱え、我が身を切

り裂く痛みに救いを求める。

私は言葉を発しない、発することができない。なぜか、ということは分からない、考えても無駄、ということくらいしか分からない。私は、この世界から拒絶されているのだろうか、あるいは、単に私がこの世界を拒絶しているのだろうか。でも、言葉は、私と世界との、関わり方の全てなのだろうか。

答えなど出そうもない、問いが増殖して、喉をふさぐ、体内で生まれる私の声は、あまりに薄弱な意志で、外へ出ることをあきらめ、ゆっくりと落ちて、消えてしまう。

でも、私の沈黙は、叫び声に似ている。言葉はそこにはない、透明の影。でも、沈黙は、私の体内であふれ、火花を放つように、目の前で炸裂する。

私は叫ぶ、誰もいない場所で、たった一人で、沈黙を叫ぶ、誰にも聞こえないそれは、この空間を満たして、私の耳をつんざく――。

*

「日記、書いてるの？」

窓際のテーブルでノートパソコンを広げてカタカタやっていた僕に、「彼女」が話しかける。「彼女」は、何でもないふうを装いつつも、ずっと青ざめた顔をして、心はここにあらずという感じで、あまり良い状態とは言えなかった。僕の方を見ているが、目を合わすことは恐れているかのように、視線は遠くに遊離して、常にブレて定まらない。真っ黒いシャツのそでを、落ち着きなく指先でいじりながら、古い映画の病弱の婦人のように、力なく息を吐いている。

病院からの帰り道も、旅館に戻ってからも、「彼女」はあまり喋ろうとしなかった、そして、僕もあえて喋ろうとはしない。「彼女」は動揺していた、そして、情けない話だが、僕はどうしてあげたらいいのか分からない、つくづく、自分は幼稚だと思わざるを得ない。僕も一緒に、動揺してさえいる、日記を書いても、それが、僕が「彼女」の代わりに「彼女」について書いているものという前提がありながら、もはや、いったい誰が誰のことを語っているのか、つかめなくなっていた。

「まあ、これが僕の仕事になってる以上は、とりあえずであっても、書いておかないとね」しばらくの間を置いて、僕は「彼女」の質問に答えた。「彼女」は、特に感慨もなく、ああ、そう、とため息のように頷く。

「疲れてる？」

それからまた沈黙が続き、気まずい雰囲気になりかけたところで、僕は苦し紛れにそんなことを聞く。

「ちょっとね、どうやらそうみたい」

弱々しい声だった、強がろうという気概など、微塵もない。

「もう、寝たほうがいいかな」

変に遠慮がちな態度で、僕は言う。つい昨日まで、だいぶ打ち解けてきて、まるで友達みたいになっていた僕と「彼女」は、また初めて会った瞬間に逆戻りしたかのように、よそよそしく、ぎこちなかった。

「そうね」

やはり、「彼女」の声はため息のように漏れるだけだった。僕はノートパソコンを閉じて、たいして眠くもなかったけど、横になることにする。白くて柔らかいふとんに身を投げ出すと、仰向けになって、天井を見つめ、ゆっくりと息を吐く。旅は、終わろうとしていた、いつ、どんなふうにも終わるとも「彼女」は明言していなかったけど、たぶん、これ以上ここにいることはできないだろうし、これから別の場所に行く可能性もなさそうだ。しかし、いったい「彼女」はどうするのだろうか？ 何も解決してはいない、解決するかもしれないという期待を、潰しただけで、あとはどうしようもない、言葉を失った女性が、独りぼつんと残るだけ。そして、僕は？ たまたま「彼女」からの依頼のおかげで多少のお金を得て食いつなげても、これからどうなってしまうのだろうか。たぶん、僕がやっているこの仕事では、満足のいく収入を得られることはないだろう、僕は自由になったけど、結局は崖っぷちまで追い込まれている、これは自由の代償か、あるいは、自由を捨てる代償によって、僕は生存するべきなのか。社会は、なぜ人を自由にしないのだろうか、社会は、なぜ、「彼女」が喋るべき言葉を与えないのだろうか。人が社会を破壊したいと思うのは、こんなときなのだろうか、ならば、なぜ、この社会は、こんなにも安穩として、のうのうと、生きながらえているのだろうか。なぜ、みんなは、僕のように自由を求めないのだろうか、なぜ、みんなは「彼女」のように、誠実な苦しみのなかで言葉を失わないのだろうか。僕は独りだ、そして、「彼女」も独りだ、互いが、別々の孤独の中にいる。僕の、他人の代わりに書くという行為は、その孤独に、どこまで深く入っていけるだろう。たぶん、結局は、その入り口で立ち尽くしてしまうだけなのだ、他人は、他人でしかない、僕には絶対に理解不可能で、絶対に支配不可能なもの、それが他人というものなのだ。ならば、僕はいったい何をやっているのか。目を閉じて、三つ数えて、目を開ける、僕はそれを繰り返す、目を開けるその度に、この世界が、ばらばらになってくれていれば良いと願いながら。そして、僕と「彼女」は、荒野の上で再開するのだ、孤独や自由といった言葉が、もはや意味をなさないような、そんな荒野の上で。

ふと、「彼女」の気配がして、僕はそちらに目をやった。無表情のまま、わずかな間だけ、僕を見つめ、そして「彼女」は、僕の横に敷かれたふとんに横になる。沈黙が重くて、なんだか居心地が悪い。互いに横になり、僕も「彼女」も、天井を見つめたまままでいる、僕は目が冴えて眠くはない、たぶん、「彼女」も、ホントは眠くなどないのだ。

「ねえ」

ぽつりと、「彼女」が口を開く。ひどく憂鬱な口調で、沈黙は和らぐことなく、さらに重苦しい、息が詰まりそうなくらいの雰囲気になる。

「何だよ」

「別れた恋人のこと、忘れられそうにない？」

「まだそんなこと聞くのか」

「答えてよ。別に、からかうつもりなんかないし」

「分からない」

「分からない？」

「確かに、ずっと頭には残ってるけど、ホントにヨリを戻したいとか、そんなふうに思ってるのか、分からないんだ」

「じゃあ、これから忘れていくの？」

「どうかな」

「ずっと忘れられなかったら？ 私が母親にそうしたように、いつか、会いに行ったりするの？」

「しないよ」

「何で？」

「何でって、会いたいというほど、強い思いじゃないんだ。バカみたいだけど、なんか中途半端なんだ」

「バカみたいなの？ そういうのって」

「だってそうだよ、前にも後ろにも、進めなくなってる。忘れるかヨリを戻そうと頑張るか、ホントはどっちかしかないはずなのに」

「そうね。確かにバカみたいね」

「やっぱり、僕のことからかってるだろ」

「違うよ、そうじゃない、だって、私もそうだったんだから、母親に会いに行くことも、切り捨てることもできなかった」

「僕の問題は、君のやつほど深刻じゃない。きっと、そのうち、どうでもよくなる」

「そうかな」

「そうだよ。結局、慣れてしまうんだ、そういう痛みに。ある意味利口で、ある意味バカなのさ、人間ていうのは」

「彼女」は黙る、何か、考えているかのように。ぼんやりとした間接照明の光が、僕と「彼女」を照らしている。互いに、互いの姿を見てはいない、ずっと、天井ばかり見ている。

「ねえ」

また、同じような調子で、「彼女」が話しかけてくる。だから、僕も同じように返事をする。

「何だよ」

「その恋人と、もう一回セックスしたいって思う？」

「変なこと聞くなよ」

「答えて」

「したいんだろうか……。たぶん、したいんだろうな。なんか、自分でもバカみたいだな、まあ、笑ってくれ」

でも、「彼女」は笑わなかった。沈黙の中で、「彼女」が唾を飲み込む音が聞こえた。

おもむろに、「彼女」がふとんから体を起こした、そして、急に僕の顔を見つめる。

「どうした？」

「彼女」が、じっと僕の顔を見たままに、なんだか思いつめているが、その表情に力は

無い。

「目、つぶってて」

「は？」

「いいから、横になったまま、目をつぶって」

妙に強い口調で言われて、僕は言われるがままに、ふとんに横になったまま、目をつぶる。そのそばで、ごそごと「彼女」が動く物音が聞こえていたかと思うと、どさっ、と僕の腰のあたりに重い物が乗った感触があった。

「おい——」

「いいから、じっとしてて。絶対、目、開けないでね」

ほとんど怒ったような声が、僕の頭上から聞こえる、「彼女」が僕の上に馬乗りになり、僕を見下ろしているのだ。衣擦れの音がした、目をつぶった僕の上で、「彼女」がシャツを脱いでいる。

「想像して」

「何を？」

「あなたの、別れた恋人のこと」

僕は言葉を失う。何だ？ いったい「彼女」はどうしてしまったんだ？僕は困惑して、この状況をどうすればいいのかわからない。僕は「彼女」を拒絶したくはなかったが、どう考えても、おかしいことをやっている。

「そう、動かないでね」

わけもわからずじっとしている僕の、上着を脱がせた「彼女」は、僕の裸の胸に、そっと唇をはわせる。冷たくて、柔らかい、濡れた感触が、ゆっくりとみぞおちの辺りまで降りていった。同時に、「彼女」のなめらかな肌が、僕の腹の上をすべっていく。

「私を、あなたの恋人の代わりに使って欲しいの」

「何でそんなことを？」

僕は目をつぶったまま、「彼女」のおかしな要求に抵抗する。

「いいから、お願い」

「でも……」

「黙って。これも、あなたの仕事。だから、私の命令は聞いてもらう」

「彼女」の指が、ためらいがちに僕の体を伝いながら、僕の下着にかかる。そこで、僕はとうとう「彼女」の手首をつかんだ。

「やめろよ」

「いやだ」

まだ、「彼女」は僕の下着をつかもうとしていた、だから、僕は自分の腕に力をこめて、その動きを制止する。

「やめろ！」

僕は叫び、そして同時に目を開けた。目の前には、僕の上に馬乗りになった「彼女」がいる、黒い下着姿で、唇を噛み、僕をにらみつけていた。僕と「彼女」は、そのまま見つめ合う、「

彼女」は興奮して、肩が動いてしまうくらい、獣のように、荒く息をしていた。

「落ち着けよ」

「私は落ち着いてる」

「嘘つけ」

とうとう押し黙った「彼女」の腕から、徐々に力が抜けて行く、それを確認して、僕はようやく、握りしめて拘束していた「彼女」の手首を解放する。唇を噛んだままの「彼女」はうつむいて、じっとしている、荒くなっていた呼吸はだんだんとペースがゆっくりになっていった。だが、次の瞬間、僕の腹の上に、ポタポタと暖かいしずくが落ちてくる。「彼女」は泣いていた、顔を紅潮させ、泣き顔を僕に見られないようにふせたまま、声を押し殺して、震えている。僕は何も言うことはできず、しばらく、その姿を眺めているしかなかった、必死でこらえ、手で顔を覆っていても、少しずつ、「彼女」の涙が僕の上に落ちてきていた。僕にはどうすることもできなかつた、どうすることもできない情けない自分をぶん殴りたいと思うくらいに何とかしてあげたくても、僕にはどうすることもできない。僕は体を起こし、せめて、「彼女」を抱きしめようと思って手を伸ばした。だけど、僕の手が「彼女」の肩に触れた瞬間、「彼女」はまるでおぞましいものを払いのけるかのように、激しい動きで、僕のその手をはじき飛ばす。そしてそのまま床に落ちていた自分のシャツを拾い上げ、立ち上がると、「彼女」はトイレに駆けこんで、部屋が振動するぐらいの音をさせてドアを閉めてしまった。僕は呆然としていた、「彼女」に弾かれた手が、痺れるくらいに、ひどく痛んでいる。トイレに閉じこもった「彼女」の嗚咽を聞きながら、僕はしびれた手を押さえていた。どうしようもないほど恥ずかしかつた、自分の浅はかさが、嫌で嫌でしかたなくなる。いったいどうして、僕は、「彼女」に何かをしてあげられるなんて思ってしまったんだろう、ひどい思い上がりじゃないか、そんなの。ひどく残酷なことだけど、僕らは誰でも良いということが常態的な世界で生きているのに、誰の代わりににもなることができないのだ。

*

「ごめん」

別れ際、京都駅の構内で、「彼女」がようやく口を開いてそう言った。まるで、こっぴどいケンカをしたカップルのように、僕と「彼女」はずっと喋っていなかったのだ。

やはり、もう僕の仕事は終わってしまい、だから僕は帰ることになった。でも、「彼女」はもう少しだけ京都に残るといふ。

「いや、いいよ。お互い、なんだか普通を感じじゃなかったし」

僕はそう答えたが、「彼女」はその答えに納得した様子はなく、無表情の下にかすかな感情の影を浮かび上がらせながら、気まずそうに、顔を背けた。

「何するの？ 京都に残って」

そのまま沈黙してしまいそうだったので、僕はとっさに話題を変える。

「何だろうね、このまま帰ってしまうと、いけない様な気がする」

「どうして？」

「ホントに、もうここには私にとって、何も得るものがないんだってこと、私が今まで、心のどこかですがっていた、ありとあらゆる可能性がすでにゼロなんだってこと、それに整理をつけてから、帰らないといけないっていうかね」

「まだ何か、やることが？」

「何も。ただ、もうしばらく、ぼうっとしてたいっていうだけ」

「僕も残ろうか」

「ノーサンキューね。単に、ここで一人になりたいだけだから」

「そうか」

湿気が多くて、暑い日だった、僕は鼻の頭の汗を親指の先でぬぐい、何の気休めにもならないが、新幹線の切符で顔をあおぐ。僕は時計を見た、一応指定席をとってある新幹線が、あと五分くらいでやってこようとしている。

「じゃあ、もう行くけど」

僕は「彼女」を見つめながらそう言う。

「うん」

何か、名残惜しさの片鱗でも見せてくれるかと思いきや、「彼女」は素っ気ない返事だけをするだけだった。まあ、「彼女」らしいといえば「彼女」らしいのだが。

改札に入った僕は手を振る、「彼女」は片手を上げてそれに応えた。

「ありがとね」

「どうってことないよ。また、何か依頼があれば、遠慮無く」

「それはなさそうね」

妙にそっけない答えを、「彼女」が返してくる、まるで、嫌いな人間を突っぱねるような言い方だ。

「そうか、残念だな。じゃあ、また……」

「もう、会うことも無いと思う」

「え？」

きょとんとする僕を、置き去りにするように、「彼女」は素早く踵を返し、そそくさと、一度も振り返ることなく、歩いて行ってしまふ。

「ちょっと……」

僕は改札を抜けて追いかけようとするが、後ろから入ってきた人にぶつかり、よろめく。それでも「彼女」を見失わないよう、身を乗り出して前を見た、しかし、その僕のことなどお構いなしに歩き続けた「彼女」は、ちょうどやって来たバスを見つけ、その中に乗り込んでしまふ。突然で、しかも、あっけもそっけもない別れ方に、僕は呆然としてしまふ、改札を出て追いかけるべきかどうか迷い、僕は結局そうはしなかった。もう会うこともない、という「彼女」の言葉を、僕は信じてはいなかった、もし信じていれば、僕は何がなんでもという体で追いかけたらろう

。去って行くバスを見送って、僕はとぼとぼと新幹線の着くホームへ向かった、観光シーズンは外しているはずなのに、駅の構内を歩く人は多かった。無数の人が歩いている、無数の話し言葉が津波のように押し寄せてくる、その津波をかき分ける真空地帯のような影、「彼女」はそういう存在だった。僕は、ずかずかと前に進む、目の前に浮かぶ、真空地帯の幻に足を踏み入れてやろうと、必死で、床を踏み鳴らすようにして歩く。まるで怒った子供のような動き方をしている僕を、通行人たちが避けていく、ある人は怪しみ、ある人はにらみつけ。何だかよく分からない、でも、僕はいら立っていた。ただ前だけを見て歩く、そうすると、瞬間、周囲の人々の声が聞こえなくなる、僕は誰の声も聞きたくなかった、誰の声も、聞く価値などないような気がした。奇妙な感覚だ、空間に何かが残響している、そこでは誰も言葉を発していないのに、言葉の影のようなものが、漂い、空間を満たしている。

*

あれから、僕は「彼女」からの連絡を待っていたが、そんなそぶりすらない。もう会うこともない、という「彼女」の言葉は、予測ではなく、決心だったようだ。

僕はまた、これまでの生活に戻る。幸い、予想に反して、今までより依頼が安定的に入るようにはなってきた、というか、今までが不安定すぎたのだが。僕も徐々にこなれてきて、より短時間で、よりそれらしい言葉を代筆できるようになっていく。それはとにかく味気ないものだったが、少なくとも、人が求めるものを提供できるようになっていることには違いなかった。

何度か「彼女」のことを考える、どうして「彼女」は、僕にもう二度と会わないことにしたのだろう、唯一、言葉を使って通じ合える僕と会わないということは、言葉をもはや捨ててしまったということなのだろうか。あるいは、自力で何とかする？ ならば僕は用済みということになる、その場合、もはや「彼女」は僕について何の期待も抱いていないことになる。結局、僕には打つ手が無い、僕は待つしか無いのだ、全くの気まぐれのように、「彼女」から、あっけらかんとした返事が届くのを。

そのまま日々は過ぎていった、「彼女」のことが、徐々に幻だったようにしか思えなくなる、それと入れ替わるように、また僕は、未練がましく別れた恋人のことを思い出したりする。雲の海から顔を出すように日常の外へ出ていた僕は、再び地上へ沈み、頭の中に、まるでリバウンドのように、遠ざかっていた日常のことまでが侵食してくる、過去の仕事、ユミのこと、さらには学生時代のことまで。

僕はできるだけ仕事に没頭するようにした、広告をうってみたり、ブログを書いて宣伝したり、とにかく暇な時間を無くして、頭の中をかき乱す、僕の日常だったものを追い出すように走り

まわる。広告なんかは採算が合わない部分もあるのだが、金よりも仕事が増えて欲しかった。何だか、ひどくムダで不毛なことをやっている気がする、それでも、僕はそうせざるを得ない。

そんな僕のところに、一つの依頼が舞い込む。よくある依頼だった、もうすぐ結婚する三十歳手前くらいの男からで、新婦に宛てた手紙を結婚式で読みたいのだが、なにぶん文才など微塵もないので、どうにか良いものを代筆して欲しいというやつだ。僕はもちろん、何の気もなしにその依頼を受ける、いつものように、適当にヒアリングをして、その内容を感動的な手紙に仕立てていく、慣れてしまった僕にとっては、ほとんどルーチンワークになっていた。それぞれの思い入れを、決まったパターンに当てはめて、決まったストーリーの構造で語るのだ、人はほとんど機械のように感動し、涙を流す。僕のクライアントが結婚して幸せになるのは結構なことだし、それを否定するつもりなどないが、僕にとって、この仕事は、僕自身を人間的な共感や感動から遠ざけつつある。

直接会いたいというので、僕は待ち合わせのために、指定されたスタバへ行った。そこで僕を出迎えた彼は、いかにも誠実そうなサラリーマンという雰囲気、さわやかな容姿に嫌味のない笑顔、パンフレットにでも載せるような、今から結婚する幸せそうな男性の典型を探すとしたら、まさしくこういう人が選ばれるのだろうという感じだ。

「初めまして、今日はお時間いただき、ありがとうございます」

出会うなり、彼は頭を下げてそう言った。彼が僕の客なのに、まるで僕が彼の客であるかのように扱われて、面食らう。

「あ、いえ、どうも。ご結婚おめでとうございます」

なんだか恐縮して、僕は気持ち彼より深めに頭を下げた。まるで社会人時代に戻ったかのような儀礼的なあいさつに、むずがゆい感じがおさまらない。

僕と彼は、向かいあわせで席に着く、ぎこちない僕と対照的に、彼はその場の緊張を上手くほぐしながら、自分のことや結婚相手のことについて話を始める。中堅メーカーで営業の仕事をしているらしく、初対面の相手と打ち解けるのはお手のものといったところだろうか、見事なものだった、僕は適当に相槌をうったり、聞かれたことに手短かに答えるだけでいい、それだけで、円滑に会話が進んでいくのだ。これだけ喋れるのなら、スピーチくらいお手のものなのではないかと思うのだが、どうもそういう、しっかりと構成を組み立ててまとまったスピーチをするのは苦手らしかった。僕と正反対というような気もする、僕はそういうスピーチを練るのは得意だが、こんなふうに喋れないし、人付き合いも上手くない、空気を読むのもおっくうだし、他人に見せる笑顔も、どこか無理をしているような部分が残ってしまう。彼はきっと僕とは全く違う人生を歩んできたのだろう、付き合う人間の種類も違うだろうし、考えてることも、日常の行動パターンも、何もかも違う、僕の目の前にいるのは、そういう人間だった。毎度のことながら、依頼を受ける瞬間は、こんな僕が相手の言葉を代弁することなど可能なのだろうかという疑いでいっぱいになる、それはもう、身動きできなくなってしまいそうなほどに。

やがて、話は本題に入る、彼がスピーチに込めたい思いや、なれそめから印象的なエピソードまでヒアリングしていく、唯一、この会話の中で僕が主導権を握る瞬間だった。ただし、僕は僕の色を出して喋ろうなどとはしない、あくまで事務的に、必要な情報を、ルーチンワークとして

聞き出していく。僕はICレコーダーを横に置き、いちおうメモを取りながら、話を聞き、構成を練っていく。どういうふう始めて、どういうふう盛り上げ、そして感動的なラストへ結んでいくのか、多少のユーモア、ドラマ、そしてカタルシスのような涙。書き慣れた僕からは使い回しのように見えるストーリーも、彼のような人々からは必要とされている、だから僕はそれを示すのだ、人は、こうやって、幸せになっていくのだと。でも、この仕事をする度、僕は僕の空虚に気づかざるを得ない、繰り返し、繰り返し、それを自覚するのだ。僕は、そういうストーリーを拒否してしまった。あるいは、同時に、「彼女」のことを思い出す、「彼女」は、そもそもそういうストーリーの線上にはいない人だった、どこか、はずれてしまった場所を、とぼとぼと一人で歩いている。僕は僕のために何かを書くことができない、何を書いて良いのか分からないのだ、そして、たぶん、「彼女」のために何かを示すこともできなかった、僕と「彼女」は、彼らのストーリーの外側を、二人ともぼつんとしたまま、寄り合いもせず、歩いているだけなのだ。ただ少なくとも、僕は彼らのために書くことはできる、彼らの代わりに、彼らが必要としているものを、提供することができる。

話を聞き終わった僕は、ふとした気の迷いとでも言うべきか、彼の結婚相手のことについて質問してしまった。半年前に、営業先で出会い、アプローチして口説いたその女性のことを、彼はとても好きらしかった。

「美人だし、性格もいいし、ホント、僕にはもったいないくらいです」

彼はあの嫌味のない笑顔でそう言う、他人の嫉妬を招きそうな言葉も、彼の人柄のせいか、素直に祝福したい気分させる力があつた。たとえ結婚制度を批判する人たちでさえ、まあ、こういうふうになんか幸せになる人がいくらかいても良いのだと思うだろう。

「あ、これ、写メなんですけど」

街で撮った面白い写真でも見せるような気軽さで、彼が僕に、結婚相手の写真を表示したスマホをさし出してくる。僕は何も言わない、その写真を見た瞬間、僕の顔色は変わってしまう、驚きのあまり何の言葉も出てこなかった、僕の気持ちは確かに彼を祝福していた、だが、その結婚を、二人の結びつきを、僕の頭は素直に受け入れようとしていなかった。

「……お名前、何ていうんですか」

僕はしぼりだすような調子で質問する。僕のぎこちなさなど、気づく様子もなく、彼は屈託ない笑顔を見せている。

「ユミです」

そうですか、と僕はうなづく。聞くまでもなかった、僕は、この女性のことをよく知っているのだから。ユミ、僕の別れた恋人、まだ僕の心の片隅にいて、ときおり僕の脳裏をかすめるその笑顔。ときどき、世の中では嘘のような偶然が起こる。良い偶然もあれば、悪い偶然もある、ただ、僕には、はたしてこの偶然が、僕にとって良いものなのか悪いものなのか、見当もつかなかった。

僕は、くらのげのようにこの一週間を漂っていた、何だかよく分からない感情を、どうにも扱いきれなかったのだ。嫉妬でもなければ絶望でもない、後悔でもなければ悲しみでもない、そういう感情の燃えかすみみたいなものが、僕の奥底に転がっていた。未練からも失望からも、はるかに遠くなる、ユミへの思い。ユミを彼から取り戻そうなんていう気はさらさらない、ハッキリ言って、それは祝福すべきことだ。それでも後ろ髪を引かれるような感覚がわずかでも存在していたのは、きっと、僕が置いてきてしまった今までの人生がそこに凝縮されていたからだろう。戻れなくなってしまった、戻ろうという期待をしていたわけではないのに、いざ失うと、ひどく鬱々とした気分になる、ユミについても、僕が置き去りにした人生についても。自分がどうしてこんなに中途半端なのか、分からず、自己嫌悪に陥りそうにすらなる。馬鹿げている、そうと知っていても、僕の理性は、感情に負け続けてしまう。

ただ、僕がやることは決まっていた、つまり、書くしかないのだ。ユミへ向けて、彼の代わりに、愛のメッセージを書かなければならない。こういうふうにして、君は幸せになるんだ、そういう物語を、ユミに対して示そうじゃないか。

僕はICレコーダーに録音したヒアリングの音声を何度も再生する、メモをめくりながら、書き足したり、線を引いて削除をしたり、積み上げるように、織り上げるように、クライアントの言葉を完成に近づける。それが僕の、いつもの作業だ。

やがて、僕の中にクライアントが乗り移ったかのように、僕はクライアントの言葉をはき出していく。そうやって、僕は誰かの代わりになりきるのだ。

だけど、やっぱり、今回はそうそう上手くいかない、彼の代わりになろうとしているのに、ユミに向けて書いていると、そこに「僕」が表れてきてしまうのだ。彼になろうとして、僕はひどく分裂していた、もはや、誰が書こうとしているのか、定かではない、僕と彼の間の裂け目のようなものが、オートマティックなマシンのように、言葉を吐き出そうとしている。これは、いったい誰なんだ、と僕は思う、誰でもない、グロテスクな、僕と彼の幻。

僕はひどく落ち込み始める、夜道を散歩したり、酒をぐいぐいあおってみたりするが、結果は同じだった。いつも僕は分裂して、彼はどこかへ遠ざかる、ぼろぼろと落ちる赤錆のように、原稿に言葉の影が堆積していく、僕は思わず叫ぶ、お前はいったい、誰なのだ。

僕が苦しんでいることなどおかまいなしに、日は昇り、また沈み、彼とユミの結婚式の日近づいてくる。もはや、躊躇している時間はない、僕は、勝算などゼロのまま、やぶれかぶれで、原稿を書き始めるしかなかった。

ユミへ

君にこんなことを言うのは、おそらく最初で最後になるような気がする。

君と初めて出会った時、僕は君にかける言葉を探する必要はなかった、ずっと自分のそばにいた誰かと話すような心地良さ、最初から、僕と君の間にはそれがあった。君と言葉を交わすことは、それくらい自然なことに思っていた。

営業先のデスクに座っていた君に、僕は、全く用事もないのに、適当な理由をつけて話しかけた、きょとんとして応えた君、僕は慎重に、無理に君の気を惹こうとせず、自然な、偽りのない言葉をかける。徐々に君の口元が緩んで、打ち解けてくれるのが分かった、僕にとってそれは、仕事に追われ会社と家を往復するだけの単調な日々の終わりを告げてくれるほほ笑みだった。

連絡先を聞いた僕を、君は軽い男だと思っただろうか、きっと誰にでもこんなことをやっていると見たらだろうか。平静を装った僕の、笑顔の裏側で、僕はまるで固くなったぞうきんから一滴の水を求めるかのように、ごくわずかな勇気を一生懸命絞り出していた。あんなふうに声をかけたのなんて、一生にただ一回だけだ。

君は、まだ彼氏と別れたばかりだと言った、だから、僕との距離の埋め方が、そのペースが分からない、戸惑っていると。僕は待つと言った、信じていた、最初の瞬間、僕が君に感じた、そのせせらぎのような自然さを。

僕が心配したほど、それを待つ必要はなかった、君はすぐに心から笑顔を見せてくれるようになり、僕らはあちらこちらへデートへ行く。とにかく居心地がいい、日常のささいな会話の度に、僕は緊張とか気負いとか、カッコつけたい気持ちとか、そういうものをどんどん脱ぎ捨てて、自然体になれることを発見していた。それと同時に、君も、覆い隠したり守ろうとしていたものを、どんどんさらけだしてくれるようになった。

そんな二人だから、ケンカはしたことがない、それは僕を不安にさせることでもあった、互いに遠慮しすぎてるんじゃないかっていう不安だ。これから、もしかしたらケンカをすることがあるかもしれないし、今までそんなことがなかったせいで、僕らは慌てふためいて、どうしていいのかわからなくなるかもしれない。でも、僕は、僕らが出会った頃からのことを考えて、きっと大丈夫だと思ってる。僕と君にとって、全てはあまりに自然なことだった、だから、もしそんなことがあっても、僕らはそれを当たり前のように受け止められるようになっていこう。だけど、できればケンカなんかしたくない、そういうことがあったとしても、少しずつ、そんなことしないのが当たり前な二人になっていけばいい。お互いを思いやる二人でいたい、たまにうまくいかなかったり、不器用だったりするかもしれないけど、その気持さえ忘れなければ、きっと大丈夫だと信じてる。

出会ってまだ半年、早いんじゃないかっていうことを言う人もいた、でも、僕にとって君に結婚してくれと言うことは、やっぱり自然なことだった。早いとか遅いとかじゃなく、したいと思ったから、その時にプロポーズした。君は驚いてたけど、でもすぐに、あの、初めて会ったときと同じ笑顔で、オーケーしてくれた。

君はとにかく優しい、僕を気遣うことを忘れない、忙しくても、疲れていても、たぶんホント

はいらいらしていたり、悲しかったりすることも、あるはずなのに。僕は知っている、君が僕の家に来たとき、こっそり、僕が普段手も付けない細かいところを掃除していたり、僕に料理を作ってくれるとき、僕の健康状態だとか疲れ具合だとか、暑い季節だとか寒い季節だとかを見ながら、栄養のバランスを考えてくれていることとか、他にも色々。君は、自分がそうしていることを僕に言わない、きっと、いつもそうなのかもしれない、誰も見ていないところで、気を遣い、いろいろとがんばってくれているのかもしれない。きっと誰かが見ていてくれる、と世の中の人は言う、でも、残念だけど、本人がいろいろがんばっているほどには、周りの人は見てくれない。だから、せめて、僕だけは見ていてあげようと思うんだ、君の優しさの一つ一つを、何も言わなくても、僕はちゃんと分かっていたい。そして、その一つ一つに、感謝してきたい。僕は決して、君の優しさを、当たり前のように考えないだろう。ごく自然な振る舞いで僕に与えられる君の気遣いを、僕も自然な態度で受け止めながら、心の中で、その特別さに、ありがとう、と言いたい。何年経っても、君が優しい人でいてくれるように、そして、僕が君の優しさを愛する人であり続けられるように。

僕はけっこう照れ屋だから、こんなときくらいしか、こういうことを君に言ってあげられないかもしれない。言わなくても分かることが多いほうがいいけど、言わないと分からないことも多いだろう。だから、たとえこれが最初で最後になっても、僕はちゃんと言っておきたかった。僕は、君に対してどこまでも誠実でありたい、だから、今日ここで言ったことを絶対に忘れない、嘘のない人生を、君と歩みたいと思ってる。

ユミ、君が僕と結婚してくれたことに、僕は感謝してもしきれない。今までありがとう、そして、これからもありがとう。

*

プリントアウトしたその原稿を読みながら、僕は二度三度と首をかしげ、そしてビリビリと破り捨てる。これではダメだ、ここには、やっぱり「僕」がにじみ出してしまっている。彼の代わりに書かなければいけないのに、どうしても僕が書いているのような感覚が混じりこんでしまう。自分の奥底に溜まってしまっていた思いが強く出てきてしまい、これじゃあスピーチというより手紙のようだ。だいたい、新郎のスピーチに新婦の元彼の、しかも直前に付き合っていた男の話を出すなんてナンセンスだ、我ながらあまりにひどくて笑えてくる。何を考えてるんだ僕は？

でしゃばりも甚だしい。彼を装って書いているのに、僕は随所に情けないくらい自分の感情を吐き出している、彼の思いを想像して書きつつも、そこに僕の思いが入り雑じってきている。これは、「彼」が書くべきものなのだ。僕は自分を消さなければならない、消してしまって、そして彼になるのだ、彼の代わりに書くのだ。

結局、何度も書き直すしかないだろう、繰り返すほどに、僕は客観視され、漂白されていく。埋め込まれた病巣の一片一片を切り除く外科医のように、僕は自分自身を消し去っていく作業を

、緻密に、根気強く行う。反復し続けることで、やがて、僕は書かれようとする僕を必然としなくなるだろう、僕はもう、そこに僕を表出させようとしなくなるだろう。そのとき、僕は置き去りにしてきたものと、決別することができるだろう。そして、ようやく、僕は彼の代わりになれるだろう。

結局、原稿が仕上がったのは式の数日前ギリギリだった。いったい何度書きなおしたか知らない。彼は満足してくれた、あのさわやかな笑顔を僕に見せて、スゴイですね、期待以上です、と言ってくれる。そのあと、彼は、あなたも結婚式に招待したら良かったですね、と社交辞令でそう言った。僕は、ぜひ行きたかったです、と社交辞令で返す。彼は知る由もないが、僕がそこに行けるはずはない。

僕はあまり長居したくなくて、早々に帰ることを告げた。僕を見送る彼は、そっと片手を差し出し、握手を求める。彼は、僕の代わりにそこにいる、僕は、もしかしたら彼だったかもしれない。そう思いながら、僕はその握手に応じる。

さよなら、平凡な僕の、あり得たかもしれない人生。どうか、お幸せに。

*

彼とユミのための原稿を書き終えたあと、僕にはとくに急いでやるべき仕事もなかったので、数日の間ぼろっとした生活を送っていた。全てが終わったあとで、考えるべきことなど何もない。抜け殻のような僕の頭に、湧き上がる気泡のようにぼつぼつと浮かぶのは、唯一、「彼女」のことだった。

「彼女」はいったい、どこで何をしているのだろうか。言葉を、取り戻すことができたのだろうか、いや、たぶん、今もまだ、同じ状態のままだろう。ずっと、何だか「彼女」に悪いことをしたような気がしてやまない。頭の中から言葉が消え去った状態を何とかして欲しいということで僕の所に来たのに、結局僕は何にもできなかった。それどころか、最後にはよけいに悪化してしまった。それは、決して僕のせいというわけではなかったのだが、何か、ちょっとでも「彼女」の助けになることができたのではないかという考えが、頭から離れない。「彼女」は、もはや完全にあきらめて自暴自棄になったとでもいうように、僕の目の前から消えてしまった。可能性がなくなっていることを確認するために京都に残る、と「彼女」は言った、それはつまりその時点で、僕ができることの可能性もとっくにゼロになっている、と「彼女」が考えていたということだ。何だかうまく説明できないが、とても悲しい気分になってくる。僕のクライアントの中で、本当の意味で僕の助けを必要としていたのは、「彼女」だけだったからだ。その「彼女」に、僕は何もしてやれなかった、僕は「彼女」の代わりにならなければいけなかったのに、僕はそうすることはできなかった。そんなことは不可能だという事実に対して、僕はあまりに素直

すぎたのではないだろうか。僕がもし、もっとバカで、それが可能だと本気で信じていれば、そういう人間にしかできないような、成功とも失敗ともつかないような、飛躍が実現したかもしれない。「彼女」と自分との間の距離について考えるときに、僕はあまりに素直に賢くなりすぎたのだ、その埋められない溝を理解してしまっているせいで、僕は「彼女」から本気で言葉を取り出そうと試みることができていなかったんじゃないだろうか。ある種の賢さは、物事を不可能にってしまう害悪になる。そういう意味で、僕は結局バカだったのかもしれない。

そして、僕にはどうも、自分の中でだけ物事を完結させようとしすぎていたきらいがある。普通の仕事の依頼ならば、それでもいい、そういう仕事は、方法論でなんとかなるからだ。他人の求めるものを、上手く現実にしていく、その作業は、単に相手が持ってきたパーツに、構造を、ストーリーを与えてやるだけでよかった。僕は他人の奥深くまでのぞき見る必要はない、目の前のふろしきに広げられたものを、同じく目の前で並び替えるだけ。関係性というものすら必要としない、インスタントに言葉を積み上げるだけでいい、それだけのサービス業だ。

しかし、「彼女」に関してだけは、そうすべきではなかった、それ以上のことをする必要があった。僕は僕の中という安全な場所から、一步も二歩も、「彼女」の方へ出て行くべきだったのかもしれない。僕と「彼女」の間の距離は、結果的に僕を守る盾になってしまう、「彼女」を観察対象とした時点で、僕は僕に備え付けられた言葉でしか「彼女」を語ることはできないし、「彼女」の代わりに僕が語ることなど夢のまた夢だ。「彼女」として日記を書くため必要なことは、「彼女」を理解することではない、それはたぶん、「彼女」の言葉や身体の動きについて、その流れのようなものをとらえ、その流れに沿って、書くことだった。つまり、理解によって作り上げられた「彼女」の彫像みたいなものに語らせるのは、まったく間違った試みだったと言わざるをえない。本当はそこに僕はいないし、僕の作り出した「彼女」もない、ただ、流れだけがある。僕はそんなことを、ユミに向けて書く彼になろうとする作業の中で、見いだしていった。僕は彼のことなど一度会っただけでほとんど知らなかったから、彼の言葉を生み出すのに、彼を理解するという手段は使えなかった。ICレコーダーとメモに表れた、彼の語り方の流れのような物を、見つける以外にはなかったのだ。そうすることで、僕はようやく自分自身と、彼の虚像を消し去ることができた。ある意味で、他人について理解するというのは、他人について語るための手段として、最悪の部類の一つに入るだろう。理解というものは、しょせん、自分の中だけで完結した世界観でしかない。

僕は、徐々に「彼女」に会いたくなっていった。ほとんど衝動に近いものが、僕の背中を突き飛ばさんばかりに押してくる。情けないくらいに、いてもたってもいられない。

京都から帰ってきたすぐあとに、「彼女」の代わりに書いた日記のデータを送信したことはある、でも、「彼女」からは何の返事もない。元気？ とか、最近どう？ みたいなノリのメールを送ってみたが、やっぱり返事はない。まるで、フラれた女とヨリを戻そうとする男みたいな気分だなと思いながら、僕はメールの受信フォルダをチェックする。

このまま待っていても、「彼女」に会えそうにはない。ならば、「彼女」に会いに行くしか

ない。とはいえ、住所など分からない、可能性として僕に残されているのは、僕が初めて「彼女」に会ったカフェに通うことくらいだった。僕が唯一知っている「彼女」の生活圈だ。そこで、「彼女」がふらりと現れるのを待つ。

僕は、足しげくそのカフェに通う、あの時座った席に座り、そこでただぼうっとしてコーヒーを飲んだり、ノートパソコンを広げて仕事をしたりする。すぐに店員にも顔を覚えられてしまい、ちょっと気恥ずかしいとも思ったのだが、それもすぐに慣れた。

そのまま一ヶ月ほど経つ、だけど、「彼女」は現れなかった。顔見知りになった店員に、黒づくめで何も喋らない女性が来てないか、それとなく尋ねてみるが、最近は全然見ない、という答えが返ってくる。

このまま待っていても、埒があかなそうなので、僕はまた、別の手段を考える。カフェに通うことは止めなかったが、さらに、定期的に「彼女」にメールを送ることにした。ちょっとした内容のものだったり、「彼女」ではなくて僕自身の日記のようなものだったり、思いついたり気が向いたりするときに、なんでもない感じで送ってみる。アマテラスを引っ張り出そうとするアメノウズメのように、ときには滑稽にふるまったりする。

それでも「彼女」は現れない、返事もない、そのままさらに一ヶ月が経つ。僕はまた、別のことを始める。今度は、僕が書いた「彼女」の日記をリライトしてみる。京都での出来事や、「彼女」のしぐさや言葉を思い出しながら、日記を書きなおしたり、書き加えたり、今まで書いていなかった別の一日について日記を書いてみたりする。いいのができたら「彼女」に送る、どうだろう？ とか聞いてみたり。もっとも、まず返事などもらえなかったが。

*

「何してんの？」

とうとう僕の目の前に現れた「彼女」は、開口一番そう言った。僕は、ずっと待っていた「彼女」の登場に、ぽかんと口を開けてしまう。予期していなかったのだ、僕はそれまでのようにメールを送り続けていたものの、特別なことを何かしたわけではなく、このタイミングでいきなり「彼女」がこのカフェにやってくる理由など、何もなかった。

「久しぶり」

僕はどうにか笑顔を見せ、「彼女」にイスをすすめる。

「驚いた。あんなにしつこくメール送ってくるなんて」

僕のすすめに応じて、「彼女」が席に着く。あいかわらず全身を黒に包んで、頭にはつばの広いキャペリンの帽子が乗っかっていた。ヘーゼル色の瞳が、僕をまっすぐ見ている。僕と「彼女」が座るテーブルの横、窓ガラスの向こうにあるテラスで、バナナの木の大きな葉っぱが、風で、ふわふわと揺れていた。

「長い間無視されてて傷ついたよ。僕に会うのは、嫌だった？」

「嫌ってというか、会ってどうするんだろう、って感じ」

「別に、普通に話し相手が欲しいとかでもいいんじゃないだろうか」

「欲しくなかったし」

「今まで、何やってたの？」

「何も。特にやるべきことはなかったから」

「絶望してたの？」

「おおげさね。何をしたいのか分からなかった、という言い方なら嘘にならないけど」

「あっちにも可能性はなかったし、もちろんこっちにも可能性はない」

「そうね」

「せめて、僕にはいくらか期待してくれても良かったんじゃない」

「やっぱり違うって思ったの、あなたと喋ると、外に向かって喋ろうとするのは」

「どうして」

「それが分かれば苦労はない。もしかしたら、私の潜在意識が、あなたを意図的に選んだのかもね。私が喋ることのできる、誰かを確保するために。そういう意味では、私は結局、誰とも喋れないの」

「何で僕だったんだろう」

「たまたま、そこにあなたがいたから。私の意識が、そういう誰かを求めていたときに、そういうのについてつけたのが、あなただったのかもしれない」

「いろいろ理由を説明してくれなかったっけ？ 僕の文章がしっくりきたって」

「説明なんてアテにならない。起きたことに言葉を貼り付けていくだけだし」

「ホントは結局、偶然だったってことかい」

「偶然のほうがなお良いかもね、気まぐれって感じ」

「僕じゃないほうが良かったって思う？」

「別にそんなことないけど。あなたは、私が期待する役割は充分果たしてた」

「そりゃどうも」

一瞬沈黙があって、僕と「彼女」は同時にコーヒーをすすめる。

「だからこそ、もう会ってもしょうがないの」

「僕には、もう期待してない？」

「しちゃだめってことね。結局、自力で何とかしないとイケないことじゃないかって思ってる」

「たぶん、僕は君のことをサポートできるんじゃないかって思うんだけど」

「何で？」

「何でって……君のことをいろいろ思ってるからさ」

僕の言葉をあしらうように、「彼女」が鼻で笑った。

「私のこと口説こうっての？ あんなことがあったからって。私は別に、そういうつもりじゃなかったんだけど」

「別に、僕もそういう意味で期待してるんじゃないよ。これでも、僕はけっこう君のことを気

に入ってるんだ」

「前の恋人に未練たらたらなのに」

「もう、ユミの事は頭はないよ。もうあの娘は結婚したし、僕もそれをちゃんと祝福したから」

「彼女」は落ち着かない様子でコーヒーを飲んでいて、カップをテーブルに置き、帽子を脱いで、飛びはねた髪の毛をなでつける。

「どうしてあんなにメール送ってきたの？ 一銭にもならないのに」

「君に会いたかったからね」

「何で会いたかったの？」

「何でって、単に会いたかったのさ。君こそ、何で僕に会う気になったんだ」

「そりゃ、あんだけずっとメール送られたらね。しつこさに根負けするわ……なに笑ってるの？」

「彼女」に言われて、僕はそこで初めて自分が笑っていたことに気づく。

「いや、何だか、よくあるカップルの馴れ初めみたいだから、『しつこさに根負けした』なんてさ」

「やっぱり口説くつもりなのね」

「悪いか」

「前の恋人が結婚しちゃったから寂しいだけでしょ、冷静になりなよ」

「僕は冷静だ」

「じゃあ、これで終わり」

「好きなんだよ」

「やめて」

「本心だ。ユミより、君のほうがずっといい」

「そんなストレートに言うなんて、子供みたい」

「確かに、恋愛は得意じゃない」

ひとつため息をつき、「彼女」はあきらめたような笑いを浮かべて窓の外を見る。

「こんな、普通の人相手だと言葉のひとつもまともに喋れない、社会適応性ゼロの女でもいいのかしら」

「問題ないよ。僕のほうこそ、全く不安定な収入しかない、いい歳こいて自由になりたがる社会適応性ゼロの男だけどいいんだろうか」

「私は、オーケーした覚えはないけど」

「強情だな」

しばらく、僕も「彼女」も沈黙していた。もう秋が来ていた、窓の外にあふれる光は、透明だった。通りを、母親と、小さな女の子が手をつないで歩いている。「彼女」は頬杖をついて、じっとそれを見つめている。

「――」

何か、「彼女」がぼつりと呟いた。

「え？」

僕は聞き返す、でも、その言葉は、僕に対して向けられた言葉ではないような感じだった。

「なんて言ったの？」

僕が聞き返したことに気づいていない様子だった「彼女」に、もう一度僕は聞き直す。

「何が？」

くるっとこちらに顔を向け、「彼女」がさらに僕に聞き返す。

「何か言っただろ、今」

別に、と「彼女」が首をかしげる。ホントに意識せずに呟いたのか、とぼけているのかは、よく分からない。でも、どこか、「彼女」は満足そうにしている。

「じゃあね」

おもむろに、「彼女」が立ち上がる。テーブルの上に自分のコーヒー代を置いて、立ち去ろうとしていた。

「待てよ」

僕は呼び止める、その一瞬、「彼女」のヘーゼル色の瞳と目が合った。

「まだ返事を聞いてないぞ」

「何の返事？」

「とぼけるなよ、僕の告白の返事さ」

「高校生みたいなこと言うのね」

「何とでも言え」

すねたように食い下がる僕を見て、「彼女」は笑っていた。

「考えとく」

帽子を拾い上げ、「彼女」が背を向ける。

「今日のこと、日記書くよ。僕が、君の代わりに書く日記だ」

僕は、「彼女」の背中に向かって言った。ぴたっと「彼女」の動きが止まり、ゆっくりと僕の方を振り返る。

「また、メールで送って」

そう言って、「彼女」は僕に笑いかけた。落ち着きと、透明感と、かすかな寂しさと、芯の強さ、「彼女」の笑顔は、秋に良く似合う、いい笑顔だと僕は思う。

「がんばって、いいやつ書くよ」

「そうね、いい日記だと思ったら、また会ってあげる」

言うと同時に、真っ黒いつば広のキャペリンをふわっとしたしぐさで頭に乘せると、「彼女」はカフェの外まで歩いて行く、すっと背筋を伸ばして、まるで秋の静かな光の中に溶けこんでいくように。

僕はその場に残って、ノートパソコンを開くと、「彼女」の日記を書き始める。今日会った「彼女」の、書かれていない日記を「再現」というよりも、「彼女」の呼吸や言葉や思考の流れのようなものをつかんで、これから全く新しいものを書くというような心持ちでやる。今までより、すらすらと書いて、それでいて自然な感じがしていた、ほとんど推敲したりはしない、僕が本当に思うままに書いていけば、僕の頭の中にある「彼女」の姿と、必ずしも照らし合わせたりする必要はなかった。

ふと顔を上げると、さっき「彼女」が窓から見つめていた、若い母親と一緒にいる小さい女の子がこちらを見ていた。僕は笑顔に向けて、そちらへ手を振ってやる。女の子はきょとんとした顔で、じっと僕を見つめてから、母親に連れられ通り過ぎていく。

その瞬間、さっき「彼女」が無意識に呟いた言葉が、頭の片隅で閃いたような気がした。僕は女の子を見送って、ノートパソコンに向き直る、そして、さっき閃いた言葉の方へ、その輪郭をはっきりさせようと、徐々に歩を進めていく。正解があるわけではない、僕はそもそも「彼女」ではない。だからせめて、僕はその歩みの中でたどり着く、最も自然な言葉をここに記そうと思う。それが、僕にとって、「彼女」の代わりに書くということなのだ。

「上手くいったんですか？」

声がして、顔を上げると、目の前に顔見知りになったカフェの店員が立って、「彼女」のコーヒーカップを片付けていた。事情を話したことはなかったが、僕と「彼女」の間にある雰囲気だけは何となく察していたようだ。どうかな、という感じで僕は肩をすくめる。

「また来るよ」

日記を切り上げ、僕は「彼女」の残したコーヒー代に、自分の分をプラスして支払う。店員はお金を受け取りながら、お待ちしています、と笑顔を返してくる。

「今度は二人で」

僕は、同じように笑顔で答え、そう付け加えた。